

〈翻刻〉式亭三馬『梅精奇談魁草紙』

(巻一～三)

丸井 貴史^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【キーワード】

式亭三馬 魁草紙 読本 今古奇観 翻案

解題

式亭三馬の読本『梅精奇談魁草紙』は、歌川国安の口絵・挿絵を附して、江戸の鶴屋喜右衛門、大坂の河内屋太助から文政八年（一八二五）に刊行された。三馬は文政五年（一八二二）に世を去っており、本作の刊行は作者歿後のことである。その成立および刊行の過程については、本田康雄氏が指摘するとおり¹⁾、岩本活東子編『戯作六家撰』（安政三年（一八五六）成）に詳しい。

文政九戌年刻成たる梅精奇談魁草紙といへる読本五巻は、浪速の書肆文金堂河内屋太助、江戸の書賈仙鶴堂鶴屋喜右衛門とはかりて、合梓にて発市に及べり。繡絵は国安ぬし画けり。いぬる文政三年辰の秋、三馬子かの草稿五巻を予に託して浄書せしむ。おのれ拙筆をもてした、めんも本意ならねば、固辞しつれども許さず。遂にその意に随ひ毫をとりたれども、遅筆にしてや、翌春におよび、辛じて落成しぬ。大人予にいへるは、原こ

の草紙のさしゑは豊広が男豊清をして画しめたれども、彼れ不幸にして世を早うし、その画半にも至らずして、その画ざしの繡絵三五丁を出し見せらる。さて其後、国直に画かせんとて稍久しく彼方へ遣し置たれども、出来ざれば取戻したりとのほなしなりし。巳の春、予が浄書畢てより、およそ間ひと、せを経て、戌の春、国安氏が筆にて出たり²⁾。

これによれば、三馬は文政三年（一八二〇）にはすでに脱稿しており、刊行が遅れたのは挿絵が完成しなかったためであつたらしい。三馬は当初、歌川豊広の息豊清に挿絵を描かせようとしていたが、早世したため残りを歌川国直に依頼したものの、これも完成が遅れ、最後は国安が描くことになったという。なお、刊年を文政九年としているのは誤認。

本作は半紙本五巻五冊で五篇を収めるが、巻一と巻二は一続きの作品であり、実質は四篇である。これらはいずれも短篇白話小説集『今古奇観』所収作品の翻案で、巻一「床下の義士窮客の為に剣を飛ばす話」と巻二「奸女が舌頭に鼠平義に負話」は『今古奇観』巻十六「李沂公窮郎遇俠客」、巻三「姦兇を逞して頑夫其身を斃す話」は巻二十四「陳御史巧勘金釵鈿」、巻四「淑女が一箭暗に赤繩を繫ぐ話」は巻三十四「女秀才移花接木」、巻五「羽束身を汚して却て身を清ぐ話」は巻二十六「蔡小姐忍辱報仇」をそれぞれ原話とする⁴⁾。三馬の翻案は原話の内容をほぼなぞつたものであり、単に人名や地名を日本のものに改めたにすぎないとする指摘もあるが⁵⁾、巻一・二の名張藩と韓木根隼太の関係性や、巻五における卜福の死の背景などは明らかに原話を改変しており、三馬の創意が皆無というわけではない。紙幅の都合上、いま詳細に論ずる余裕はないが、三馬の白話小説利用法についてはなお検討の余地がある⁶⁾。

書誌

○所蔵 国立国会図書館（請求記号：190/222）。

○表紙 黄土色、波に武士・巻貝（兜をかぶった武士が海に向かって立つ姿があしらわれる）。二二・一×一五・五糎。五冊（合一冊）。

○題簽 左肩。子持ち杵。「梅精魁草紙」。一四・七×三・六糎。

○構成 第一冊・見返し（半丁）、序（二丁半）、目録（二丁）、口絵（四丁半）、巻一本文（十二丁）。第二冊・巻二本文（十九丁）。第三冊・巻三本文（三十丁）。第四冊・巻四本文（二十四丁）。第五冊・巻五本文（三十三丁）、奥付（半丁）。

○序末 「文政七年甲申仲秋／撰都 木村繁雄録（「明啓」の印）

○見返し 「梅精奇談魁／草紙 全部五巻 浪華書賈文金堂藏／江城本街延壽丹主人故式亭／洒落齊三馬遺編歌川國安画圖」

○序題 「梅精奇談魁草紙序」

○巻首題 「梅精奇談 魁草紙卷之壹（五）」⁽⁷⁾

○尾題 「梅精奇談 魁草紙卷之壹畢（三畢、四、五大尾）」⁽⁸⁾

○柱刻題 「魁草紙卷之一（五）」

○匡郭 四周単辺。一八・六×一四・〇糎。

○挿絵 第一冊・十二ウ・十三オ、十六ウ・十七オ。第二冊・三ウ・四オ、十ウ・十一オ、十七ウ・十八オ。第三冊・六ウ・七オ、十二ウ・十三オ、十八ウ・十九オ、二十四ウ・二十五オ。第四冊・八ウ・九オ、十六ウ・十七オ。第五冊・七ウ・八オ、十四ウ、二十一オ、二十八ウ・二十九オ。

○行數 序・每半葉七行、本文・每半葉十一行。

○奥付 「東武 故式亭三馬遺編／全 歌川國安画圖／文政八載

乙酉新鐫春王正月吉辰發版／江戸通油町 鶴屋喜右衛門
／大阪心齋橋通唐物町 河内屋太助」

○備考 本作には「海賊奇談繪本魁」の外題を持つ後刷本がある。そのひとつである関西大学図書館中村幸彦文庫所蔵本（請求記号：5409）に従えば、序・目録・口絵・本文・挿絵は同板であるが見返しはなく、末尾に河内屋源七郎の広告「軍書小説類藏板目録」三丁が附される。なお、奥付には「製本處／大阪心齋橋通北久寶寺町／四町目十八番地／前川源七郎」とある。

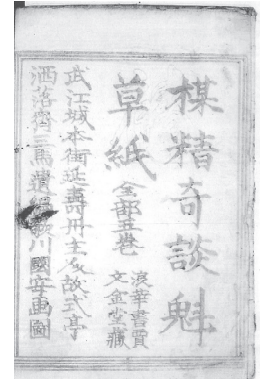
凡例

- 一、漢字は原則として通行字体に改めた。ただし底本の字体を残す必要が認められる場合はそのようにした。
- 二、底本の句読点はすべて「。」であるが、読点は「、」に改めた。ただし適宜取捨し、また補ったものもある。
- 三、必要に応じて濁点を補った。
- 四、誤字・衍字は適宜正し、誤字については注記した。
- 五、脱字と思われるものは「」に入れて示した。
- 六、左訓は（ ）に入れて示した。
- 七、会話文ならびに心中思惟は「」に入れて示した。なお、会話文中に別の会話文が挿入されている場合は、『』に入れて示した。
- 八、踊り字は底本のままとした。ただし「と」は「々」に改めた。
- 九、口絵・挿絵はすべて掲げた。
- 十、底本の丁移りは「（一オ）」のように示した。

翻刻



（表紙）



（見返し）

梅精奇談魁草紙序

如^ニ唐山ノ野史小説^一、其作者不^レ可^ニ枚挙^ス。雖^ニ毫傑之徒^一欲^トス不^レシテ得^レ志^ヲ而屈伏^シ、鬱滯^{シテ}而発^トレ狂者、托^ニテ諸^ヲ虚辞綺語^ニ以^テ遣^レ懷^ル者、往々不^レ鮮。近年我土、如^ニ小説家^一、売^レ辞射^レ利、術^{（一）}媚^{（二）}於市井兒女^ニ者比々^ト是^{ナリ}。多^ハ逸寸之徒^一為^レ苦^レ貧而潤^中口腹^上者亦不^レ鮮。然彼此、至^テ其舒暢之域^ニ也一^{（一才）}矣。而称^{セラル}世之作^者ト豈容易哉。其構^レ思吐^レ錦也。或^ハ招^ク空中之蜃気楼^ヲ。幾^ト移^ト南柯之蟻穴城^一、或^ハ発^ス鄭国濮上之音^ヲ。終^ニハ是^レ帰^乙於^レ伐^ニ罪惡^ヲ、獎^ニ忠孝^一之規矩^ニ。噫性善之所^レ徴、而勸善懲惡之功、亦不^レ為^レ少^{シト}。如^ニ三馬式亭子^一、近來小説家之尤者^{ナリ}。惜^イ夫、死而既^ニ歴^ニ三霜^ヲ。如^ニ魁草紙^一、浪華書肆某、不^レ遠^ニ千里^ヲ、乞^フ諸^ヲ式亭子^ニ。既^ニ一ウ^{（一ウ）}脱^{シテ}稿^ヲ、未^レ及^ニ上木^一、而式亭子帰^ニ于^レ黄泉^ニ。有^レ故束^ニ之塵架^一、荏苒^{トシテ}徒^ニ過^レ歳^ヲ。茲歳甲申ノ秋、書肆已^ニ上^レ梓^ニ。噫此数冊子、雖^ニ僅々タル者^一、成^ニ於^レ其死歳^ニ則^ハ、雖^ニ其著作富贍也^一、豈可^レ不^レ為^レ珍^ト乎。

文政七年甲申仲秋

撰都 木村繁雄録 明啓（2才）

全部標題

- 第壹回 床下の義士窮客の為に劍を飛す話
- 古寺の雨やどり しら波のかくれ家
- 第二回 奸女が舌頭に鼠平負^レ義^ニ話
- うまのはなむけ 風のまへのともし火（2ウ）
- 第三回 姦兇を逞^{シテ}頑夫其身を斃^ス話
- しら布のこがね かたみのかんざし
- 第四回 淑女が一箭暗^ニ赤繩を繫^ク話
- なにはの隣同士 からうたの辻うら
- 第五回 羽束身を汚^{シテ}却^テ身を清^ク話
- 波の月のうきわかれ むくひのしら刃
- 通計五帙（3才）

(3ウ・4才)



(6ウ・7才)



(7ウ)

(4ウ・5才)



(5ウ・6才)



梅精奇談 魁草紙卷之壹

○床下の義士窮客の為に劍を飛す話

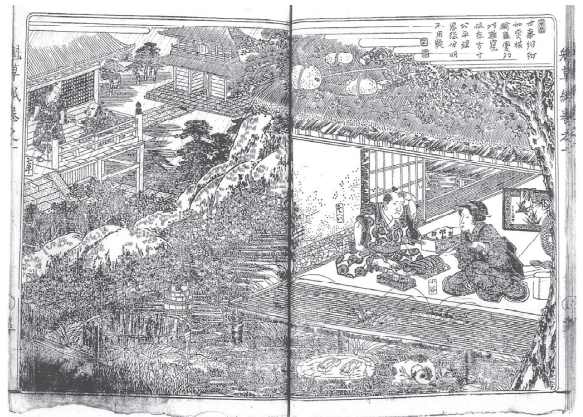
いづれの頃にかありけん、都の五條わたりに羽昨鼠平といふ者あり。些の才気ある身ながら、年四十に近きまで生理に疎きゆゑ、家道はなほだ貧くして、僅に妻が紡績、或は機織る業を頼て細き煙を立俵ぬ。頃は九月の下流、漸く寒気に向ふ時なれども、海松のごとく破裂れし襦袢の衣一重にて、寒さを凌がんで方便だになし。いかにもして一套の繪縵を得ばやと、左右思ひめぐらすに、忽ち妻が篋の中に二反の木綿あるを見出し、用ひて我衣服に製むことを計る。妻小谷は出身の賤しき者なりければ、器狭く心邪に、口には針を含めて罵り、腹(8才)には毒を蓄て行ひ、事の応変に巧にして、高きには高く答へ、低きには低く答へ、死たるをも活たると言張り、活たるをも死たりと説得て、只顧唇を翻し舌を弄ぶの奸婦(わかきをんな)なり。平常吾夫の世事に疎くして、斯まで貧窮に及ぶことを厭ひ、いかなる因果にてか、る貧しき家に嫁し来りけん、父母の失計(おもひれちがひ)を恨む折から、適夫に吾蓄置く所の木綿を需られ、辛気に堪ず口を開きていふやう、「你丈夫に生れながら却て女に養はれ、此年月を送るのみならず、又吾蓄置く木綿を需て、你的衣服に用ひんとするは、鉄面皮(あつかはづら)の骨張といふべし」。鼠平此言を聴て、面に紅葉を帯び、心に恥入るといへども、猶声を低うしていふやう、「吾素より當生に拙く、常に你的力を借て世を渡ること、謝するに所なし。吾今こそ斯貧くは暮せ、他日(おしつけ)登庸(しゅつせ)の時に遇は、今日二反の布十倍にして、あなたが(8ウ)鴻恩に報ふべし」といふ。小谷頭を揺て、「又例の十倍の給ふか。雲を掴むに奇き虚誑も最早聴倦たり。你四十に至るまで発達(よにいづる)の時なく、いつを待てか享福の來ることあるらん。此二反の木綿は指をもし給ふな。吾が寒を防ぐ緊要の貨物な

り。你的衣服は你的計策に任せて、吾が関する所にあらず」とした、かに辱められ、鼠平は布を乞得ざるのみならず、彼が毒ある言を聴て、心に憤を含むといへども、荒だてな隣家へ聞えんことを慚恐れて、我は一言をも交へず、却て妻が怒罵るを宥居たり。されど算計(もくろみ)すでに竭て、「此上はせんかたなし。日頃親子人々に打嘆て、ともかくも計見ん」と思ひければ、空く家を出て交友の許に到り、辞を卑うして物を乞需るといへども、いかにせん阿漕が鳴に曳く鯛の、度重れることなれば、今まで笑居たりし人も忽ち渋き面になり、誰一人頭を對て愁を俱にする者(9才)なし。鼠平せんかたなく此所よ彼所と走回る折から、頼む木下に雨漏るのみかは、忽ち一陣の風雨、雲を巻て起りければ、彼海松のごとく襦袢の衣、颯々として落葉の声をなし、惣身寒粟を生じて寒さに堪ず、風雨を侵して走けるが、忽ち一字の古院を見つけて、辛うてこ、に馳入り、しばらく雨を避んとす。此寺号けて金華禪寺といふ。まづ山門に進て見るに、既に一人の大男、先だつて雨舎して左なる回廊に憩居たり。堂の内には老僧の経を誦する声のみ。鼠平即ち右の方なる回廊に坐して、しばらく時を過すに、雨やうく止て風も静になりぬ。此時帰すば再び又降来らんことを懼れ、身を起して顧るに、此回廊の壁の面に、一羽の鶏を画たり。翼より足に至るまで精に画たれども、却て首を画かず。「いかなる人の業ならむ。心ありて画残せし物か。戯れに画終ざるものか。我今饑(うゑ)。(9ウ)寒に逼りし身にて、此絵を評する違はあらねど、兼て聞及びしことあり。凡て鳥を画かんとするものは、頭を先にすること画法なり。しかるに人と異りて、却て画完ざるこそ不審けれ」と、しばし停止して仔細に見れば、巧に画得てはなほだ愛玩すべし。「か、る精妙の画を此まに棄置んは朽惜し。我此道を曉さずといへども、試に鶏首を画添るに、何の難きことかあらむ」と、堂中に至

りて老僧に一枝の筆を借来り、直に鳥の頭を画添るに、十分醜からざれば、心はなはだ歎び、「我若丹青を学ば、名ある画工となりて世にしらるべきに」と、独戯れてイむ所に、彼回廊に坐せし男、最前より此体を見居たりしが、俄に進来りて礼を施していふやう、「小人此事につきて些の話あり。ねがはくは我家に來り給へ。話中におのづから好所あるべし。你的為あしくは計はじ」といふ。鼠平今困窮(10才)の折から、好所ありと聴て大に喜び、筆を和尙に返し、彼男に従て直に金華寺を出去りぬ。此時風雨止むといへども、地上いまだ乾かず。泥に迂りて歩難きも厭はず、東山をも過て真葛原に到れば、道の傍に小さき門あり。彼男こゝに伴ひて門の扉を掛け、内より「応」といらへて門を開く者あり。此男も又是同伴の男に等く、丈高く風標(りつば)なるが、鼠平を見て咲を含み、太だ歎べる所勢なり。鼠平心中疑惑を生じ、「此両人の者は何人なるや。我を請じ來りて何の好処かある」と心落着かず、「此家は誰の家なるぞ」と問に、二人答で「君まづ裡へ入給はゞおのづから曉得給ふべし」と、引て門内に入らしめ、元のごとく門戸を鎖して進み行く。鼠平傍を見るに、落葉路なまきまでに覆重り、枯草おのがまゝに散乱れ、荆藜木犀庭にはびこりて、敗落たる花園なり。高きに上り(10ウ)低きに下り、広きに曲り狭きに湾りて、一軒の茅舎に到れば、内より又十四五人、おのゝ雲を貫くばかりの大男、眼するどく髭深く、猙獰なるが出來り、迎て亭中に坐せしむ。鼠平心中驚怪み、只黙然として坐し居たるに、彼伴ひし男、詞を發していふやう、「你駭き給ふな。我々は皆江湖の豪傑(すぐれたるひと)と呼ぶ、者なり。他の貨を自有となし、本錢を費さずして生意をなせども、各勇あるのみにして謀を施す者なし。さるによつて前日も殆危き目に遇んとせり。故に天に祈りて智謀ある人を求め、首領となして其指揮に従はんと思へり。彼金華寺の壁面に首なき鶏を画

たるは、我々が天に祈て設る所の誓にして、羽翼全くして却て頭なきは、即ち数多の徒党はあれども首領なきの意なり。もし人ありて鳥の頭を補足す者は、これ天より(11才)賜はる謀師(はかりごとをする人)なれば、こゝに迎て首領となさんことを思ひ、数日等候といへども、いまだ其人を得ず。今、日幸ひに皇天靈を下して、我々に君を賜はる。寔に真実(ほんとう)の首領(おかしら)といふべし。願はくは謀を施して我々を導給へ」。鼠平これを聴て、彼輩は一夥の強盜なることを曉り、大に駭きていふ、「我は素より物を学び、書を講ずることを業とすれば、登運(よにいづる)の時を得て、仕官(みやづかへ)をまつ者なり。清きが上にも、潔きことをこそ計れ、かく穢れたる業を佐けて法を犯すに忍びず」といへば、衆賊(ぬすびと)も、呵々と打笑ひ、「君の見識(おもはく)はなはだ違へり。たとへ官府の人となるとも、身終るまで公務(おほやけのつとめ)に役はれ、式目に身を縛られて、下半生の快きことを得じ。吾夥の首領となりて、美酒佳餚を味ひ、安佚に世を過さんにはしじ。君もし不肯は(11ウ)強て勸るにあらず。我々が大事を明せし上は、再び活ては帰さじ。彼金華寺に画きし鳥のごとく、首なき人となして放歸さん」といへば、傍より口を揃へて「いかにも其如し。もし妻に遇たくば幽霊となりて家に帰るべし」と、衆賊腰刀を抜てひらめかすに、鼠平魂も身に添ず、「各しばらく待給へ。吾深く思案して返辞すべし」と、手を挙て喚呼はれば、「汝従ふも従はざるも一言に決せよ。何の商量かあるべき」と前後左右より取籠て、今や斬らんと構たり。鼠平想ふに、「斯く人里遠き山寨に墜り、もし彼等に従ざる時は、一刀の下に命を落さん。我まづ彼を偽りて其言に従ひ、明日にいたりて遁去るとも遅からじ」と思ひ定め、「それがおのの勸にあひて、何ぞ従はざることのあるべき。只恐らくは心弱き性質にて、此業をなし得ざらん」と(12才)

いへば、衆賊これを聴て、「正直なることをいふ人かな。我々くとても、胞衣に山岡頭巾を冠り、手に大刀を携へて、母の胎内を切破ては出す。仏も元は凡夫なり。賊も皆素人よりなるものなれば、初時は誰も心弱し。勉て度を重れば、自ら胆太く英豪(じやうぶ)の心に移るものなり。君もし言に從て我が首領となり給はゞ、半年をまたずして必ず豪強となり給はん」と、或は崇め或は嘯して、さまざまに勧めれば、鼠平やむことを得ず、竟に彼等が意に從ぬ。衆賊喜ぶこと限なく、刀を取て鞘に納め、おの／＼無礼を侘畢りて円居におしなほり、「斯一家となる上は、以来君を敬て兄と稱すべし」とて、一套の新しき衣服を取出し、鼠平に着換させ、又一腰の佩刀を帯しむるに、鼠平が人品、前に比れば大きに同じからざれば、皆齋しく喝采せり。鼠平素より(13ウ)貧しき身にて、かゝる華麗なる衣服をはじめて着たることなれば、思はず心を動かし、密に衆賊の言を思ひめぐらすに、「一理なきにしもあらず。吾丈夫の身にして、深秋(あきふくる)にいたれど冬を迎ふべき計なく、借老を契る妻だに二反の布を惜み、情なくも与へざりしに、今此輩義氣ありて、斯のごとき美服をあたへ、又吾が指揮に從はんといふは、寔に僥倖といふべし。いかさまにも此夥中に加はり、一生の快活(よきたた)よきた

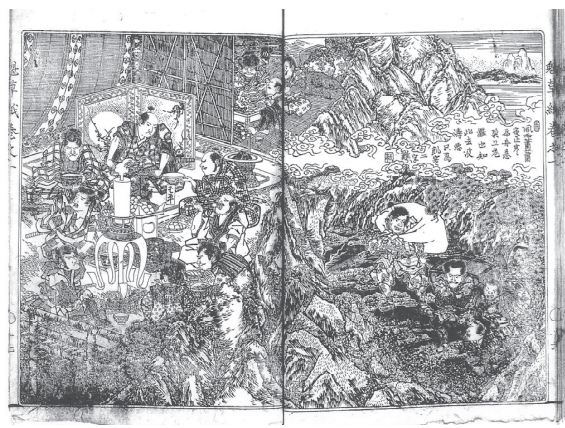


(12ウ・13オ)

のしみ)をなさん」と思ひ、又ひとつには「万一宙兵に拿られなば、吾が性命も保難からんか。とやせん、かくやせまし」とさま／＼に思煩ふ所に、衆賊酒館を携来り、鼠平を進めて上坐に居らしめ、おの／＼車座に居流れ、盃を飛せて舞娯む。平常飯をだに十分には食得ざる鼠平なれば、斯る美酒佳肴を恣意に飲食ひ、心中大きに娯しみ、又(14オ)密に想ふやう、「吾一生身骨を粉に砕くとも、かやうの造化には遇難かるべし。まづ彼等が言に任せて、一兩度賊をなすとも、かならず人の曉り得ることならん。兩三度に許多の黄金を盗まば、其後業を廢て管生をなすべし。若又不幸にして拿られ、刑に行はる、とも恨むる所なし」と、商量(りやうけん)すでに定り、憂を忘れて呑喫ひ、しばらく時を移しけり。斯て黄昏過る比、一チ人の盜賊進み出、「今日首領に對顔の手はじめなれば、少しく家業をなしてはいかゝあらん」といへば、衆賊「最」と一同し、「まづ誰が家にか打入らん」と、とやかく商議(さうだん)するを聴て、鼠平はやくも首領の心移りけん、威儀を正し一坐を見度して、「凡都の町／＼富家(かねもち)多しといへども、北嵯峨なる狭賀長長者に過たる者なし。いはんや彼所は洛外にて、宦兵の夜廻りなどもなく、吾又(14ウ)案内をよく知りぬ。おの／＼吾指揮に從はゞ、よき活計あるべし」といふに、衆賊大きに喜び、「彼長者は、我々久しく心を懸れど、案内をしらざるゆゑ、是まで空しく打過せり。今日首領の案内にまかせ、且指揮に從はゞ、袋の物を探るがごとくなるべし」と、衆賊すみやかに支度を調へ、群る虎の山林を出る勢ひをなし、おの／＼園門を出て進みゆく。扱此狭賀長長者といへるは、代々北嵯峨に住て、金銀財宝をせしらず、都に名高き豪家(かねもち)なり。此頃盜賊の為に許多の財宝を奪取られ、即ち問注所に訴へて後、数多の人を備ひて四方の門戸を護らせ、用心堅固に防ぎけるを、鼠平が輩かくとは夢にもしらず、門を打破り

て馳入る所に、警固の大勢一斉に起り立、太鼓を打ち喊を作りて迎戦ふ。兼て号令を定めたる隣家の人々、太鼓の(15才)音を聞くよりも、得物々々を引提て、此家の四面を取囲み、一チ人も洩さじといどもみ合ふ。盗賊等、敵の多勢なるを見て慌騒ぎ、路を奪て走らんとするに、加勢の人に支られ、力を尽して戦へども、多勢に無勢敵し難く、竟に悉く拿られ、鼠平も又繚縲の中にあり。天明にいたりて問注所に訴へければ、捕置たる盗賊等を目代所に引下して、罪の次第を弁明しむ。此時間注所の目代は、名張部といふ者なり。是よりさき、韓木根隼太といふ人、勝れて義氣篤き目代なりしが、好て幻術を行ひければ、公務(つとめむき)を懶く思ひ、ねがはくは一所不住の身となり、随意に術を施して世を玩んことを思ひ、幸ひに部が篤実なるを監定て目代の職を継しめ、竟に致仕して後、吾家をも顧ず、いづくともなく出去りぬ。扱此部は、生得忠義の心深く、世を救ひ、民を安ずるの(15ウ)才あり。今日代の職にありて、上を敬ひ下を憐み、平常心を尽して、冤讞なからんことをねがへり。此日十余人の盗賊を広庭に引出さしめ、密に目を挙て伺見るに、其状貌悉く猙獰なる中に、鼠平一チ人が風采閑麗にして、賊をなすべき人物にあらず。部一たび見てまづ憐むの心あり。すなはち一チ人毎に前に進ましめて、細密に罪状を尋問ふ。やがて鼠平が番に至りてやうくくに這出、涙を流して告げるは、「小人幼きより書(ほん)を読み、儒を業とし、素より盗賊の類にあらず。家貧しうして詮方なく些の財を借んが為に、昨日友人の許に行るが、途中雨中に逢て金華寺に到り、鶏を画きてより彼等に威し侮られ、昨夜やむことを得ず、はじめて盗夥に入し次第」「と」仔細に訴へ歎きければ、部素より鼠平が貌を見てはなはだ惜み、又彼が詞の(16才)哀れに切なるを聴て、人しれず釈し還さんと思へども、同罪一夥の中にて一チ人を助けがたく、飯に喝て退かしめ、衆賊とおなじく獄中(ひと

や)に捕置ぬ。其夜下司の虎平六といふ者を密に招かしむ。此虎平六、先年冤の罪に罹りて死刑にも及ぶべかりしを、部が仁心に助けられしかば、深く其恩を感じ、常に部が為に力を尽さんことを思ふをりから、夜中急の招きにあひ、何事やらんと馳来りしを、まづ一間に呼入れ、「さて汝を招きしこと別義にあらず。今、日罪を糾問せし盗賊の中に鼠平といふ者あり。我此者を見るに、相貌軒昂してことば清爽なり。これいまだ時を得ざる豪傑と見ゆれば、彼を許さんと思へども、衆賊の眼を覆がたし。故に汝が手段を頼み、透を見て彼を逃さんことを思ふ。此三両の金子を、彼が路用に与へて、遠国に隠れしめよ。近辺に(17ウ)あらば再び拿らるべし。扱彼を逃して後、朋輩に咎られなば、汝が身に禍ひ来らん。夫にこそ方便はあれ。まづ彼を放ちて後、妻子を伴ひ吾が第中に隠れ住むべし。汝は吾が左右にありて親近の勤仕をなさば、今の食禄に増るべし」と、一チ仔細に諭しければ、虎平六六六に喜び、快く諾ひて直に獄中(ひとや)に走り行き、守護人に打向ひて、「新に来れる罪人を一所の獄に下し置ば、おそらくは大事を起さん。早く諸処に配分して同じ所に置くことなかれ」と分付れば、守護人此言にしたがひ、衆賊を引て四方に分ち居らしむ。此隙を窺ひて、虎平六は鼠平を誘ひ、片



(16ウ・17才)

陰に連來りて、目代部が情のほどを細くと語りきかせ、金子を出して与へければ、鼠平辱さ身に余り、「小人今生にて此恩を報ひ得ざらば、来世は犬馬(18才)となりて、万が一をも報ふべし。是すなほち、譬のごとく、地獄に在て活仏の相公に見え奉り、紫麻黄金の路用を授るのみならず、苦患を救ひ給はる鴻恩、骨に鑄り胆に銘じて忘れ難し」と感涙を催しければ、虎平六打笑ひ、「吾が相公は仁心ありて、今汝を救ひ給へど、報を待の賤しき志にあらず。汝此後行ひを更めて、回生(いきかへる)の徳に負く事なかれ」と、仔細に教諭して後、吾が衣服を脱て鼠平に着せ、後門に人なきを窺ひ、密に垣を越て走らしむ。鼠平思ひよらず命を助り、北国の方に逃下るに、適昔の友人、越前の榛原に仕居たるに遇ひ、此度の難を語り歎くに、彼人これを憐み、聊の役を与へて藩中にとゞめしかば、鼠平やうく心を安じ、密に人を都に遣はして、妻小谷を呼迎へ、しばらく安佚に二光を送りぬ。扱又虎(18ウ)平六は其夜俄に家財をとりかたづけ、密に妻子を携へて、薮が衙内に隠れ居けり。扱も守護人等は翌朝にいたり、囚人に食事を喫しめんとして、獄舎(ひとや)の鎖を開くに、鼠平が在ざるを見て大キに怪み、獄舎の隅々、点検(ぎんみ)すれども影をだに見ず。衆人慌駭て、早く虎平六に告んと、大勢門口にいたるに、門戸いまだ開ざりしかば、頻に打叩けども、家内静りて声もせず。せん方なく戸を破りて走入るに、厨下具をとりちらしあるのみにて、すべて一軒の空舎となりぬ。こゝに於いて、囚人を売放つ者は虎平六なることを、衆人はじめて悟り、一斉に目代所にいたりて其由を訴ふ。薮偽りに大きに驚き、即時に捕卒を領遣りて虎平六を探さしめ、又上書して其罪を乞ふ。問注所の序に於て薮が罪を正し、官(やくめ)を罷(はなし)て民(らうにん)となし、(19才)四方に人を遣はして、鼠平虎平六兩人が行方を厳しく尋けり。扱此名張薮は、家道(しんだい)貧しき上に、

目代部の職に在ても決して賄賂を受ざるゆゑ、此の蓄さへあらねば、即日家財を收拾めて、虎平六をば女の形容に打扮せ、一群の女中に交へて伴連れ、浪くとして古郷に帰り、みづから耕す事二年あまり、益貧困に逼る所に、適友とせし何某、越中の国司に招かれしが、今は老分の職に在る由を聞て、彼を尋訪はんと思ひ、虎平六並に東五西六といふ二人の奴僕を携へ、行く越前の榛原に到りける。

梅精奇談 魁草紙卷之壹畢 (19ウ)

梅精奇談 魁草紙卷之二

○奸女が舌頭に鼠平義に負く話

斯在し時、歩卒杖を把て進み來り、「官司きたり給ふ。各馬を下りて路の傍に倚べし」と呼ぶ。薮これを聴て片陰に避躲るに、虎平六はるかに彼官司を驚きて云、「怪しいかな、先年放ち遣りし盗賊の鼠平に似たり」。薮これを聴て自ら窺ひ見るに、果して鼠平なりければ、大キに駭き又心に思ふやう、「我前日、この人は未だ時に遇ざる英雄ならんと思ひしに、果して今斯のごとし。いかなることに斯斗り俄に登運の身となりけん。彼にしたしく問んとは思へども、此方より詞を交へては、前日の報ひを求るに似て、心に恥る所あり」と、只首をたれて黙し居たり。彼官司やうく近くなり、薮を見とめて大キに驚き、馬より飛下りて礼を施し、「恩人それがしを見て、なんぞ避躲れ給ふや。(1才)小人先年、回生の恩を請て此地に走り、今のごとく發達せしも、全く君の恩徳に依り。先我家に宿して長途の疲勞を想め給へ」と、手を取て馬にのせ、兩人くつわを並べて往ほどに、一所の別荘に到り、薮を書院の内におらしめ、猥に人の入ことを許さず、只扈從一人をとめて給仕せしめ、虎平六ならび

に東五西六の三人は、別室に置いて饗さしめ、又腹心の家隸、北二南
 斯の三人を衛中より呼よせて、万事を管待はしむ。鼠平いかなれば
 威と偽りて此高禄を得しかば、今日蔀との問答を人々に聞えなば、
 忽ち偽謀あらはれ、此後嘲けられんことを懼れてなり。鼠平蔀を引
 て上坐に進め、虎平六を其次に居らしめ、遙に坐を下りて頭を地に
 つけ、「寔に再生（いのち）の父母（を）や」にめぐりあひ、活仏の
 来迎を一齐に拝するがごとく、歡喜形容すべからず」と、再三前日
 の恩を謝し畢り、扱虎平六に向ひて、「你にひとつの頼あり。我今
 かくのごとき身となりし故、昔年のことを深くつゝめり。我家僕等
 の（1ウ）聴ところにては、先年の始末を語り給ふな」といへば、
 虎平六點頭て、「これはの給ふまでもなく、我も他聞を憚れば、彼
 一大事は決して言わじ」と、三人かはるゝ往事を語りて、互ひ
 に感慨す。鼠平問ていふ、「吾足下をのがしたる咎によりて職を罷られ、し
 ばらく故郷に耕すところ、此頃一人の友人、越中の国司に仕へをり
 しを尋ねがため、此辺を過りて、はからず足下に遇ぬ」。鼠平驚き
 ていふ、「恩人元來、不肖が故をもつて官を罷られ、不肖かへつて
 禄を竊みてこゝにあり。深く愧るに堪たり」。蔀いふ、「義の為には
 命をおしします。区々（らちのあかぬ）たる卑職（い）やしやくぎ）、
 なんぞいふに足らん。只足下の身上、わかれし後いかにしてか此高
 官を得たる」。鼠平いふ、「不肖獄屋を遁れてより、不慮も友人の
 選挙に因て此国につかへ、甚だ国司のもてなしをうけ、半年の後、
 昇てこの（2オ）所の郡領となりぬ」。蔀此話を聴て、原より忠良（ま
 ことある）の人なれば、鼠平があまりに急に出身したるを見て、後
 には奢傲（おごり）不良（よからぬ）の心を引出さんことを恐れ、規訓して
 云、「人の官に居る、上は朝廷に負かず、下は百姓を害らず、小利

のために惑されて汝の節を改むることなかれ。たとへ一時の僥倖を
 得るとも、笑を後代に貽すべからず」。鼠平拜謝して、「恩人金玉の
 教へ、不肖一生忘るべからず」と、又席をあらためて酒をすゝめ、
 山海の珍珠を備へて丁寧にもてなし、半夜にいたりて漸く盃を収め、
 みづから桐褥を敷設け、潮罌を携へ、聊親切の意を表す。蔀かくの
 ごとく鼠平が懇なるを見て、信義（まこと）ある人なりと感嘆し、
 両人心を傾けて、心事（こゝろの内のこと）を残さず語合ひ、たが
 ひに相愛する事数日の後、蔀暇を告て越中へ赴んとす。鼠平再三とゞ
 めて、別去る（2ウ）ことを許さず。蔀いふ、「足下の懇切（ねん
 ごろ）を請て、我も又別去るに忍びず。しかれども、足下も一懸
 の主なるに、吾こゝに在るゆゑに政務を廢る事数日。吾心穩ならず。
 明日決して別去るべし」。鼠平彼がとゞまらざることを察し、「しか
 らば明日一樽（ひとたる）を備へて、餞別（はなむけ）の宴（さか
 もり）をなし、明後早朝発足し給はゞいかに」。蔀「しかるべし」
 と同じければ、鼠平暫時第宅に帰り、禮物を備へて贈らんと思ひ、
 漸く身を起して本宅に帰りぬ。こゝに彼が妻小谷は、昔年落魄あ
 りし時、万事吾俚に計ひしが癖となりて、今も何事によらず、みづ
 から思ふまゝに管待ひしが、此頃鼠平別庄にとゞまり、南三北二兩
 人の家僕を呼よせしより以来、十日あまり本衙内に帰らず、何事を
 かなすらんと怪み居たりしに、此日鼠平が帰り来るを見て、例の唇
 を翻していふ、「你何事の（3オ）ありて久しく第に帰り給はざるや。
 冬来れば夏を忘れ、夏来れば冬を忘るゝに等しく、昔の貧苦をはや
 くも忘れて、若隱妻などし給はゞ、其俚には捨置じ」と罵る。鼠
 平是等の事は耳にもかけず、恩人に遇てより別荘にとゞめ置し委細
 を語り、明日餞別の贈物を調へんが為に帰りし由を演れば、小谷
 領首て、「さらば一兩ばかりの金子を贈り給はんか」。鼠平笑て、
 「吾性命（いのち）を救ふの恩人に然ばかりの物を贈られんや」。小

谷云、「しからば又壹両を増与へて早く出し帰らしめよ」。鼠平いふ、「汝なんぞ斯のごとく吝きことをいふや」。小谷素より鄙吝(しはんぼう)の生れなれば、心中大きに喜ばず、又仮意といふ、「しからば十両にてはいかに」。鼠平いふ、「十両ばかりの黄金は、只虎平六に贈るべし」。小谷これを聴て大きに呆れ、「さらば五十両をおくるべきか」と思ひ切て尋ぬるに、(4ウ)鼠平「いまだ少し」と答るゆゑ、此上は千仞の谷底へ身を投るの想をなし、「しからば百両を贈るべきか」といふに、鼠平やうく頷く。小谷いふ、「此頃僅に官を得て、なんぞ此大金あらん。たとへ吾身までを売るとも数に満べからず」。鼠平いふ、「庫をひらきて取出すべし」。小谷おどろきて、「庫中(くらのなか)はすべて朝廷の錢糧にして、すなはち国司よりの預物なり。なんぞ私に用ふることをせん」。鼠平いふ、「汝が詞きはめて理ありといへども、恩人にはかに帰るに、贈るべき物なきをいかせん。小谷、夫が家財をつくして贈らんとするを聴て、心もだえ、我身の肉を割る、がごとく、しばらく思案して在けるが、忽ち不良こゝろを起していふ、「你なんぞ決断(とりきはめ)なき。吾にひとつの捷徑の計あり。所詮彼が(だいおん)大恩を報ふべき術なければ、今宵すみやかに彼等を殺尽さば、乾浄(さつぱり)としてよきにあ



(3ウ・4オ)

らずや」。鼠平(5オ)驚きあきれていふ、「汝なんぞかやうのことをいふや。先年汝に木綿を求めしに、汝惜みて与ざりしより、他人に借んとして事起り、盗賊の夥に墜り、すでに命を失ふべかりしを、彼名張氏、自分の官職を廃て救出されたればこそ、今日夫婦一所にあることを得れ。然るを又我にす、めて、恩ある人を傷しめんとするは何の道理ぞや」。小谷笑ていふ、「你平常(おんなん)一々ある毎に、吾が木綿を与ざることをいひ出して吾を恨み給へど、吾身十七歳より你に従ひて、我所持の衣服道具、悉く你にあたへて用に充たり。なんぞ二反の木綿のみを惜まん。其時吾木綿をあたへずして少しく辱しめたるは、你を激して業を勉しめんと思ひし故なり。然るになんぞや、自ら事を引出し、却て吾をうらむは甚だ道理にあたらす。且彼名張氏、其時你を助けたるは、豈真(あま)の(5ウ)義気ならんや。彼相識にもあらぬ人の為に、なんぞ自分の官職を捨て、重き囚人を救はんや。彼おもふに、你是賊中(ぬすびと)の首領(かしら)なれば、助け帰さば後日おもし謝礼あらんと思ひて、救し返せるもの也。さなくば大勢の中にて、なんぞ一人を救さんや。今夫婦此所にあるを聞て、それとなく来て謝礼を求るものなるべし」。鼠平頭を揺ていふ、「当時吾を救ひしは、只彼人の仁心なり。なんぞ別の意あらん。今恩人、越中に往んとして吾にとゞめられ、久しく滞留せば吾が政務(まつりごと)を妨んことをおそれ、強て帰らんといふものなり。わざく来りて我を訪ふにあらず」。小谷いふ、「彼が越中にゆくといふも、又これ偽なるべし。彼虎平六を携へて来れる、是証拠なり。もし果して越中にゆく者ならば、隠し置きし虎平六を携ふべからず。又数日此所にとゞまるべきよしなし」。鼠平云、「(6オ)「彼が此地にとゞまりしは、吾が再三懇にとゞめしゆゑなり」。小谷いふ、「夫こそ彼が心を用ふる所にして、你が彼に対して実情を尽すか尽さるかを試みしものなれ」。鼠平素より主意の定まらぬ性なれば、妻の

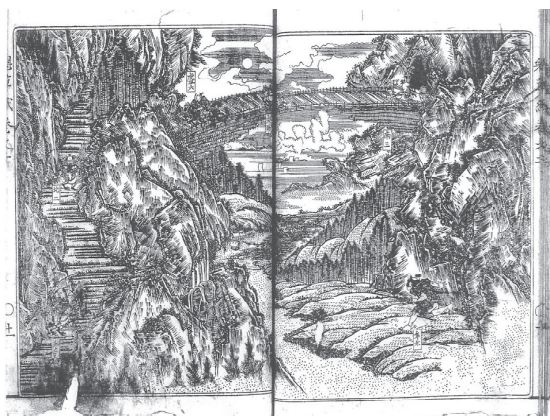
為に説れて、心中漸疑ひを生じ、沈吟して答へず。小谷又いふ、「必竟此恩は、いかにしても報ふことを得べからず。其ゆゑは、若報ふこと薄き時は、彼怒て旧悪を誅へ出なば、夫の性命危ふかるべし。又報ふこと厚き時は、彼度々来て求るとも与ざることを得ず。若し聊も彼が心に負かば、又おなじく害を蒙るべし。你今もし吾が言を用ひずんば、後に必らず悔の事あるべし」。鼠平こゝに至て、妻が言一ちく理ありとして、其言に従はんと思ひしが、又再び思案していふ、「本これ吾方より彼が恩徳を報ぜんと思ふのみにして、彼よりは少しも求る所なし。(6ウ) おそらくは彼に其意なからんか」。小谷笑ていふ、「彼你が手を出すを見ざるゆゑ、敢て口を出さず。期に臨まざらわかるべし。それはともあれ、此度彼も別意なくとも、你的行末はなほだ危ふし。其故いかにといふに、彼人の爰に來りて你とはなほだ親しきを見て、衝中の人其訳をしらず、必定彼が家人に問はん。彼が家人、なんぞ你の為に醜きことをかくさんや。必ず実を語るべし。しからば衝中の人、追々聞伝へてあなたの旧悪を唱へなば、你何の顔ありて此地に足をとゞめんや。又彼人も、もし実に越中へゆくならば、彼地に到りて必ず此事を語らん。さらば忽ち衆人の耳に触れ、漸々伝へて此地にいたり、終に你的大きな害をなすべし。しかし、今急々に手を下して、後の禍を除かんには」。鼠平はじめより、部が家僕の真説を洩(7オ)さんことを恐れし事なれば、今小谷がいふ所、正に自己が思ふ所に合したれば、遂に心を決して、妻が言に従はんとしけるが、又思案していふやう、「彼とゞまりて我家にあること、策中(やしきうち)の人しらざる者なし。若今夜手を下して、明日彼が輩を見ずんば、衆人はなほだ疑ふべし。且、口をばいかして出さんや」。小谷いふ、「是何の難きことかあらん。今夜酒をすめて彼等を酔臥しめ、人を遣して刺殺し、其後火をかけて書院を焼払ひ、明日骨を拾ひて葬

(はうぶり)をなさば、衆人焼死たりと思ひて、誰か怪む者あらん」。鼠平大きによるこび、「此計はなほだ妙なり」と、妻が智謀(はかりごと)を称讃(ほめはやし)し、急に其支度(しやく)に及びけり。壁に耳ありといへる謔(うたげ)も宜なるかな。彼が家來北二、先刻より片陰(かたかげ)にありて兩人の間答を聞き、大きに駭きて思ふやう、「原來我が主人、かくのごとき兇悪の人なり。(7ウ)かゝる悪人に従ひく、何の益かあらん。一人の命を救ふは、浮屠化千体を造るに勝るといへば、密に彼輩に告げて、彼等四人の性命を救はん」と、急に別荘に到り、書院を伺ふに、南三は茶を煮ながら睡り居て、虎平六は見えず。部一人端坐して、書籍(もの、ほん)を披き居たり。北二急に進より、声を低うして一ちく委細に語りければ、部大きに驚き、「もし足下の義によつて告るゝなくば、吾が性命今夜に限るべし。此恩徳、他日かならず厚く報ふべし。足下の主人鼠平が如く、恩に負く人を学ぶべからず。不肖急にこゝを去らんと思へども、禍を足下に遺さんことを恐る」。北二いふ、「小人又妻子なし。君が去り給ふの後、又密に遠く走らん」。部いふ、「しからば我とともに、越中にいたらばいかゝあらん」。北二いふ、「君もし棄ずんば、ねがはくは鞭を執て従はん」。部いふ、「虎平六、二人の(8オ) 奴僕と共に草鞋を買に出たり。いかゞせばよからん」。北二いふ、「在下行てたづね來らん」と、急に書院を出て見るに、早く南三を見ず。原来南三、睡さめて厠に往たるを、北二は吾が話を聞つけて、主人鼠平に告んとして走れるものならんと思ひ、心大きに慌驚き、其由を部に告るに、これも又忙ふためき、兩人荷物をも棄置して、急ぎ門外に走り出るに、幸ひ鼠平が飼馬三疋つなきて門前にあり。北二こゝろに計を生じ、馬夫にむかひて、「貴賓(おきやくじん) 西の城門に行て客を迎へ給ふ。はやく其馬を率來るべし」といふに、馬夫(うまかた) (うまかた) いそぎ二疋の馬を率出す。二人急ぎ鞍(くら)に上るに、幸に虎平六が歸り來る

を見て、又一匹を出させ、三騎飛ぶがごとく、市中(まちなか)を離れんとする所に、西六東五、草鞋を提て走来る。(8ウ) 葦声を上て、「汝等只我後に従て、多く言ふことなかれ」。虎平六、主人の斯如く慌いそぐを見て、何の縁故なることをしらず、只後れじとして馬を打て走る所に、忽ち向より三騎の人馬出来る。近より見れば、是も又鼠平が属吏等也。其中一人は央助といひて北二が親しき朋輩なれば、北二央助に對ひて、「貴賓(おきやくじん)、今日來客(くるひと)を迎給ふが、従者勞れて歩難し。你的馬を借奉るべきか」と問に、央助なんぞ従はざらん、鞍坪を扨ひて奉る所に、二人の従者やうくに追着来りければ、央介、則ち鞭をわたして馬に騎しむ。是より五騎二十箇の馬蹄、大風の発するごとく越中を望んで走行ぬ。偕又南三は厠より出て茶をさ、げ、書院の中に来るに客人を見ず。爰かしこ尋もとむれども影だに見えず。定て庭に出て花を見るならんと思ひ、待つこと一時ばかり。猶帰来らざるゆゑ、外に出て尋んとする所に、折よく主人の進来るに遇ぬ。鼠平(9オ)南三に對て、「北二は何に在や」と問ふに、「されば内には見えず。名張公に従ひて外園に出しなるべし」といふに、少しく疑を生し、爰かしこ尋覓る所に、忽ち央助来るを見て此由を訊れば、「先刻西の城門にて遇奉りしが、北二同道して客を迎るよしにて、在下が馬を借て家僕を乗しめ、都て五人辻風のごとく走りゆきぬ」。鼠平聽をはりて密事の洩しことを曉り、心中驚けども再問ず。急ぎ策中に歸りて此由を語るに、小谷大きに驚愁へ、「想ふに彼いまだ遠くは往じ。你速く心腹の人に命じ、賊のごとく打扮て急に追着、一斉に殺さしめ給へ」。鼠平則央介を呼て計較(さうだん)するに、彼しばらく思案していふ、「小人一ツの計策あり。多勢を動さずして彼等一人も遁さじ。其ゆゑは、在下が隣家に一月前より一人の異人の住むあり。何の生意もなく、毎日外に出て沈醉(ゑひしれ)し

て歸る。ゆゑに小人、彼が來歴を正さんとするに、(9ウ) 一日一人の豪士、馬を躍らせて、従者数人彼家に留る事三日にして去る。ひそかに彼家頼を呼て懇にたづねしに、彼人はなほだ劍術に達し、よく刀を飛して人の頭を取り、又よく飛行して鳥の翔るがごとく、先日人に代りて仇を報じ、跡を隠して爰にあり。些の礼物を送りて彼を頼まば、万に一ツも仕損することあるべからず。小谷屏風の後より出来りていふ、「此計きはめてよし。早く往て其人を頼むべし」。鼠平すなはち廿兩の金を懐にし、南三央助を引つれ、夜にまぎれて彼異人の門を叩くに、異人出来りて門を開き、「誰ぞ」と問ふ。央助声をひそめ、「是は此所の郡領羽咋公なるが、自ら爰に來り、義士に見え給ふ」。異人いふ、「我家なんぞさやうの義士あらん」と、又門を閉さんとす。央助おしとめて、「暫く門を閉給ふな。語り申すべきことあり」。(10オ) 異人いふ、「吾今睡らんと思ふ所なり。用あらば明日來られよ」。鼠平いふ、「急なる話にて、翌を待つ暇あらず」。異人は非なく引て内に入らしむるに、鼠平礼物を獻じて云、「不腆の薄儀、いさ、か義士の為に心を致す」。異人笑ていふ、「小人無学無能(ぶちやうほうなるもの)、なんぞ義士の称に當らん。此礼物又用ふる所なし。早くに持歸られよ」。鼠平身を屈めていふ、「礼物薄しといへども、在下が一点の誠心をあらはす。幸に拒むことなかれ」。異人云、「你身を匹夫に屈し、又此厚礼(こうれい) (かろからぬしな) を賜ふ。何の求むる所かある」。鼠平いふ、「義士まづ此礼物を請給はゞ、其時ゆるくと告申すべし」。彼人いふ、「在下貧しといへども、故なき礼物をとらす。你もし明らかに告ずば、吾決して受じ」。鼠平わざと泣ていふ、「在下ひさしく大冤を蒙り、今その仇目前にあれども、恥を雪ぐことあたはず」。(11ウ) 義士望らくは、小人が為に此賊を除き給はゞ、生涯この大徳をわすれじ。彼人首を揺ていふ、「在下吾が身の事さへ策なく、なんぞ人の為に大事を謀

らん。かやうの話、もし人に聞かれては甚だよろしからじ」と、外に向て走り避んとす。鼠平やうくに袖を引とめ、「吾、義士は人の為に害を除き、危きを救ふと聞て、わざく来りて願へども、義士の為に憐れまれず。思ふに、此仇長く報ふことを得じ」といひ終りて、大きに嘆き悲む。彼人この形勢を見て、実情なることをしり、即いふ、「你的讐いかやうの縁故にて、今何所にかある。細に告給へ」。鼠平偽を矯ていふ、「名張部といふ者、前年（まへかた）在下を誣て盗賊なりとし、獄中にて責を受ること数日。又幾度か獄卒虎平六をして、吾が性命（いのち）を失はんとせしかども、悉く人の為に（12才）たすけられ、又後官情ありて小人が冤をしり、やうく放されて後、此所に官を得しに、此頃又虎平六と共に来りて、許多の金を求め、猶意に足れりとせず、吾家頼北二に頼みて、在下を殺さんとせしが、事あらはれ、今日北二と共に越中の方へ遁れ去りぬ」と、弁舌懸河のごとく、言を巧みに語りけり。此異人は是誰ぞといふに、前の目代職にありし韓木根牟太なりければ、鼠平が語る一部始終を細に聞終りていふ、「奸賊にくむべし。元来部虎平六が出身（みもと）は、我よく知る所なり。部は篤行の君子なるゆゑ、吾が後官として目代の職に居らしめ、虎平六は先官（せんやく）某判断



(10ウ・11才)

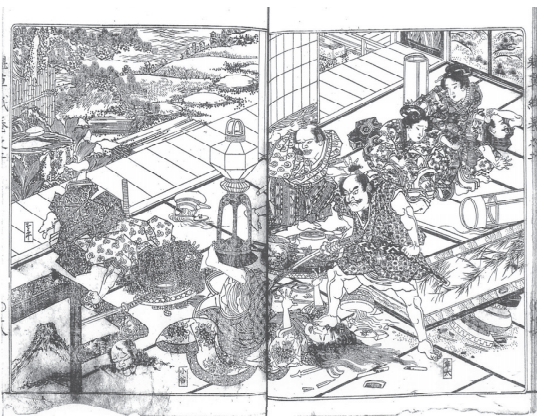
を誤り、死刑に行ふべかりしを、我急に後官となりてより、彼が罪を糾明するに、其罪正しからざるゆゑ、後日証拠の出来るを待て是非を（12ウ）決すべく思ひ、永く獄中に禁め置しが、後に部が裁判によりて冤の事明かに彰れしかば、部が属吏（したやく）となせし由ほのかに聞き、彼等二人、かくのごとき兇悪の人とはしらず。我監定（めき）を誤れり」と大きに怒り、二元来足下、此の大冤（おほきなるむじつ）を蒙るを、我なんぞ見るに忍びん。今夜越中に走りて此賊をたづね、足下の為に仇を報じ、夜中には帰り来らん。鼠平いふ、「然ある時は義士の大恩天地と斉し。事成の日は重く報ふべし。しかれども彼等五人、今日午刻（ひるどき）より鞭打て走たりしかば、行程十余里は隔りつらん。然らば往反（ゆきもどり）二十余里の行程を、夜半までには竟束なし。異人色を正しうしていふ、「我なんぞ謝礼を求めん。此礼物早くに持返るべし。又行程百里を隔つとも、何の難き（13才）ことかあらん。我夜半といふに覺なくてははず」といひも終らず、刀を執て門を出、その走る事飛鳥のごとく、瞬く間に見えずなりぬ。鼠平兩人と共に呆れ驚き、「実に異人なり。されど目代の先官といひしは心得ず。彼が帰るを待て再び問明らめ、又再び賜らん」と礼物を收拾て、我衝中に帰りぬ。扱も虎平六と西六東吾の三人は、主人部の走るを見て、何の縁故なることをしらず、馬を駈てゆく事五六里、日既に暮れども宿をもとめず。幸ひに十三夜の月明らかなるに乗じ、馬をはやめて路の嶮阻を厭はず、只跡より追人の来らんことを懼れて、物をもいはず急ぎけるが、亥の刻（夜の四ツ時）に及てひとつの村に到る。此時にいたりて、人困み馬倦れてゆく事能はず。北二いふ、（13ウ）「道すでに遠く、追人の来ることもあるまじ。今夜は此処に宿りて明朝はやく走るべし」。部その詞にしたがひ、一軒の旅店を覓め、各奥の一室に入りて労を休めけるが、虎平六問ふて云、「彼

羽咋主人、懇に饗し明日人馬を備へて送らんといはれしものを、今日却て荷物をも棄置して、難を逃るゝ者のごとく、連夜に走りて辛苦するは何の縁故ぞや」。部嘆じていふ、「汝なんぞしらん。今日北二主なかりせば、吾も汝も身を葬るの地なからん。今幸ひに虎口を遁れ得たり。何ぞ辛苦を顧ん」。虎平六驚きて、其縁故を問はんとする時、旅店の主、此客五人五騎、深夜に宿をとり、些の行李もなきを見て、心大きに疑ひ、前に進みて問ていふ、「客人何の主意をなし、何方より(14才)爰に來り給ふや」。部これを聴て、亭主を前に坐せしめ、即ち鼠平が盗賊をなせし時、その才貌を憐み、密かに虎平六をして釈放さしめ、其罪によりて官(やくぎ)を罷(はな)さる)られ、適此国を通りて他にとゞめられ、厚く饗されしが、今日彼、妻の讒言を用ひて吾を殺さんとせしを、北二が告るによりて遁れ來りし事、前後細密に語りければ、虎平六大きに怒り、店主も嗟嘆して止す。北二傍より、亭主に云つて酒飯(さけとめし)とを出さしむ。店主出で去りて後、忽ち床下を鑿りて現れ出たる一人の大男、身には襷を引結び、手に刀を執りて威風凛々、殺氣騰々たる。部主従大きにおどろき、魂も身につかず、首を地につけて、只一命を饒し給へ」と叫ぶに、彼人はやく部を扶起し、「部主、驚くことなかれ。吾は韓木根隼太なり」といふ。部これを聴て、(14才)怪夢(こはきゆめ)はじめて寤たるごとく、又再び驚き、「故人(むかし)のともだち)何の事ありてか爰には來り給ふ」と、隼太を上坐に進めて後、この縁故を問ふに、隼太がいふ、「我世を避て後、四方に周遊し、寓を一所にもとめず。平生義によりて人を救ひ、勉て天下(よのなか)不義の事を悪めり。今夜適鼠平來りて虚談(うそばなし)を告げ、吾をして足下を害さしむ。なんぞしらん、彼かくのごとく義に負き、恩を忘るゝの賊ならんとは。吾床下(ゆかのした)に在て足下の話説を聞はずは、恐らくは足下のごとき長者(を

となしきひと)を殺さん」。部頻に頭を叩て、活命(たすかる)の恩を謝す。隼太いふ、「謝する事なかれ。我しばらく去りて又再び來らん」と。即ち広庭に出けるが、身を躍らして屋根に上る。其疾き事飛鳥のごとく、忽ち見えすなりぬ。衆人大きに駭き、彼人再び來りて何事をなすかと、心下安からず。(15才)扱又鼠平が妻小谷は、夫が歸り來て事の整ひたるよしを聴、かぎりなく喜び、酒をとり肴を備へて夫婦相樂しみ、央助をも第中にとゞめて、共に義士の歸るを待つ。三更(夜九ツ時)の頃に及びて、幽閑なる庭中(にはのうち)たちまち宿鳥驚き鳴き、木葉乱れ落ち、一チ人の大男堂上に入る。鼠平目を挙て見るに彼義士なりければ、ひとつには驚き、ひとつには喜び、迎へて坐上に進め動静を問はんとするに、義士忿然として刀をひらめかし、罵りていふ、「汝鼠平、恩に負く賊。名張氏は救命(いのちをすくふ)の恩人なるを、報ひを為さざるのみか、婦人の言に従ひて害さんとし、事あらはれては過を悔むべきに、又虚誕を飾て、吾をして賢人(かしこきひと)を殺さしめんとす。汝がごとき極悪人、はやく我が刃下(かたなのした)の鬼(いうれい)となるべし」。鼠平色を失ひ、詞を出さんとする所に、(15才)頭すでに地に落たり。小谷は平生物に驚かざる性なるが、爰にいたりて胆を失ひ、口を開く事を得ず。口裏はじめて阿弥陀仏を念じ、又万歳樂を誦し、一縮になりて震ひ居たるに、義士又罵りていふ、「汝狗、婦、丈夫に善(よきこと)を勧めずして、かゝる姦兇の事をなさしむ。吾、汝が胸を裂て、汝が胆の他に異(ことかはる)なるや否やを試ん」と、右の膝にて彼が股を押へ、左の足を伸て彼が頭を踏つけ、刀を取直して胸より膺まで裂開き、刀を口に咥へ、両手をかけて五臟六腑を引出し、血のしたるをも管はず、燈下に照し、独言していふ、「かゝる悪婦の胆は他に異ならんと思ひしに、案の外尋常(ひとなみ)の胆なり。いかにしてかやうの狼毒をなせしや」

と傍に投棄、さて二級の首を斬て革囊の中にいれ、又庭に下り、塙を越て走り、再び葦が(16才)旅店(やどれるいへ)に到る。此時儼に四更(夜八ツ時)の鐘声(かねのおと)響り。隼太いかなる法ありてか、かゝる疾足の術を得たりけん。斯て主従の前に進み、革囊を投出していふ、「義に負く賊、吾すでに腹を裂き、腸を屠りぬ」と、二級の首を取出すに、葦大きに驚き且喜び、首を地につけていふ、「在下立山をも見ざるの前、ひとつの活地獄(このよのぢごく)に墮(おちいる)し、修羅(きつたりはつたり)の苦患(くるしみ)を得べかりし所に、却て手も下さずして仇を報ふ。足下の高義謝するに所なし。願はくは住所を告給へ。他日厚く報ふべし」。隼太からくと笑ひ、「足下いまだ我が行跡をしらずや。我是まで報をもとめず。只義によりてする所なり。且住所も定めず。今は韓木根隼太とも呼ばず、すべて姓名あることなし。只今日、此家の床下より出たれば、他日もし相逢は、床下(ゆかした)の義士(いきぢあるひと)と呼び(16ウ)給ふべし」。葦いふ、「吾足下の大志はしるといへども、独曉し難きは、最前の挙動なり。我輩過分の力をつくし、馬足(うまのあし)を借てすら、午時より亥刻(夜の四ツ時)に至て、儼に十余里に過ぎ。しかるに足下、往反(ゆきもとどり)二十余里の行程を、一刻の間に往来し給ふはいぶかし。是いかなる術を究め給ふや」と問へば、隼太笑て、「いかなる術なるか我もしらず」と答へて、懐より一封の葉を出し、此ばかりを掴みて首の切口にふりかけ置き、疾く走り出て去る所をしらず。葦二級の首を棄置れしかば、いかせんと思ふ所に、怪しいかな、此首漸々に縮みて小さくなり、看く消て水になりぬ。衆人奇異(めづらし)の思ひをなし、漸く心を安じければ、天明にいたりて又馬を催し、往く事兩日にして越中の国府に着き、さて彼旧友(むかしのとも)を訪ふに、彼(17才)人故人(むかしのとも)を見て大きに喜び、

衙内にとめて饗応す事数日、葦前事を仔細に語り出すに、彼人も又感嘆して止す。扱又鼠平が家にては、其夜央助南三の兩人、大勢の奴僕と共に、義士の主人を殺すを見て震ひ戦き、小陰に隠れ居たりしが、程なく天明てより国司に訴ふるに、衆官大きに驚き、諸司許多来りて詮議するに、央助南三口をそろへて、葦が奸計、彼の義士を頼みて鼠平夫婦を殺させしならんと仔細を訴へければ、即時に健児を遣はして彼義士を捕しむるに、早く跡を隠して影をだに見ず。衆人さまざまに商議するに、葦は是、越中の国に旧友あるといふのみにて、慥に姓名宿所をしらず。又平生鼠平が薄徳(とくうすし)ゆゑ、誰ありて仇を報はんとする者なく、(18ウ)只夜半盜賊の為に殺されたりと披露して扱止ぬ。此後数年を経て、葦は越中の国司の推挙(とりもち)により、再び都に帰りて高官に陞り、常に義士の行方を尋ねて、恩を報はんことを思ひしに、或時三條の街にて、白馬に乗て過る者を見るに、彼床下の義士なりければ、急ぎ馬より飛下りて礼を施すに、義士咲て、「大人よく吾を見覚え給ふか。葦いふ、「不肖日夜君の恩を忘れず。何ぞ見忘れ申さんや。願はくは吾家に來り給へ」。義士いふ、「近日別に高門を叩くべし。今日は命に従はず。もし大人吾を棄給はずんば、我家に來り給へ」。葦欣



(17ウ・18才)

然として馬を並べて行に、一條戻橋の辺にいたりて馬を下り、一ツの小門の内に入るに、一坐の高樓雲に聳へ、普請の(19才)結構いふばかりなく、奴僕數十人趨て相迎へ、請じて堂中に坐せしめ、しばらくありて饗応の筵席、善美を尽し、王侯(だいまやう)の富といふとも、是には過じと思ふばかりなり。やがて数人の美女を呼出し、各歌舞しむるに、いづれも顔桃花のごとく、絶世の佳人なり。部義士と俱に、古今英雄の事を談論し、暮に及びて別れ帰り、次日礼物を備て再び尋ぬるに、只一所の空宅(あきや)あるのみにて、家財奴僕、いづこに遁去りしかるべからず。静むなしく嗟嘆して帰る。後來部ますく高位に陞り、北二虎平六も、又些の官職を得て、安穩に世を送りしとなり。独彼床下の義士はいかゞなりしか、其終を知らずとなん。

梅精奇談 魁草紙卷之二 畢 (19ウ)

梅精奇談 魁草紙卷之三

○姦兇(わるだくみ)を逞して頑夫(たはげもの) 其身を斃(う)しなふ)す話

ある人の歌に

心なく花の下枝を折る人のたもとは露にぬれずやはある

世の諺に、人を呪はゞ穴ふたつといへる、宜なるかな。人を傷はんとする者は、人をば傷得ずして、却て其身を傷ふ者多し。花の枝を折る人の、いまだ折果ざるに袂を露にひたし、衣を裂破るにたとへて、斯は詠なるべし。いづこならん地はしらねど、真九郎といへる者あり。年長たれども妻を娶らず、一チ人の老母を養ひ、油を賣て生活とせしが、一日例のごとく油桶を担ひて出けるに、途中頻に

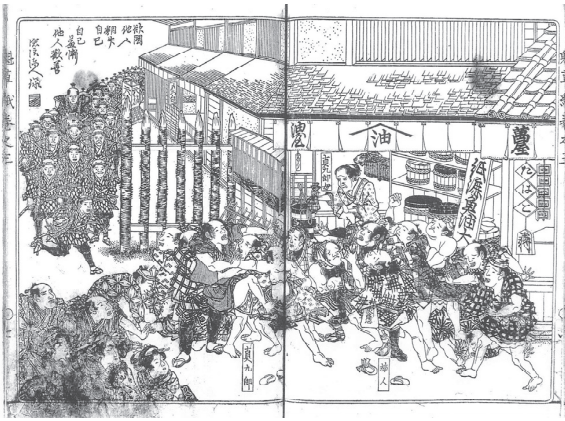
大便の気を催し(1才)ければ、傍なる厠に入りしが、はからずも裏肚を拾ひぬ。中に一封の金ありて重き三拾両余とおぼし、真九郎歡喜に堪ず、急ぎ家に帰りて老母に對ひ、「我今日はからざる造化を得て、許多の金を拾ひたり」と、裏肚を出して見せけるに、老母大きに駭きて、「你いかなる巧をなして此金を偷來れるや」と問ふに、真九郎答て、「吾敢て他の物を盗みたるにあらず。何人の落せしかはしらねど、厠の中に在しゆゑ拾取て歸れるなり。我等が如き些本錢の者、容易此大金を得難し。明日より此金を油の本錢となさば、以前に増りて双倍の利徳あらん」といふに、老母聽て頭を揺り、「古へより貧富(まづしきもとめるも)皆縁命(天のさづけ)といへり。若你此金を得るほどの果報あらば、かゝる貧き家に生るまじ。你が心を設て謀得たる金にはあらねど、又(1ウ)辛苦して得たる物にはあらず。功なくして禄を受なば、却て其殃を受むことをおそる。此金を脱せる人、もし借來れる物にて、索ても見えざる時は、其苦みいかばかりならん。命を失ふに至らんもしられず。吾躬つめりて他の疼さを曉れとは、此等のことをいふぞかし。你早く拾取し所に到り、若尋來る人あらば、速に歸し遣すべし。譬へば橋なき大河に橋ひとつ造りしごとく、大きな陰徳なれば、あなたの為あしきことあらじ」といへば、真九郎素より正直なる性なりければ、老母に教訓されてはなはだ其理に伏し、即時に裏肚を携へて本の厠の辺に到れば、一叢の人、一チ人の男を囲み、其男懐を合るさまにて囁居たり。元來此男は他国の者なるが、此厠に入て金を脱し、立帰りて尋れども其裏肚見えざれば、許多の人を備來り、糞坑の中を(2才)探さんとするを見て、街上の人々すべて此光景を見んとて会集れるなり。真九郎此由を聽て便ち彼人に向ひ、「其許の脱せし金は員数何程ありしや」と問に、彼人口にまかせて「四五拾兩なり」といふ。真九郎これを聽て、「白布の裏肚なりや否や」

と問へば、彼人駭きて、「寔に白布の褻肚なり。你もし拾ひ給は、歸し与給へ。我寔に謝物(れのしな)を奉らむ」といふに、衆人の中にも快嘴の男ありて、傍より言を發していふ、「御兩人半分に頒給は、利の当れる所なるべし」。又傍より言を發していふ、「まづ何物に納て脱したるや、其主に尋ねて後是非をいふべきに、拾主、我から其物をさしていへるは甚麗忽なり」など口ぐにいひさわぐを、真九郎耳にもかけず、「寔に我過刻拾ひて我家にあり。你我と共に来られよ」と、彼人を誘ひて立歸るに、衆人も又跡につきて従行く。(2ウ)真九我家に至り、彼褻肚を出して持主に与ければ、彼人其中を改め見て、本のごとく不足なきをしれども、只真九に謝物を贈らむことを恐れ、又衆人の主張にて平分にせられんことを悲み、俄に欺心を起していふ、「本我金子は五拾兩あり。汝半を隠したらん。速に出して我に還せ」と荒かに罵ければ、真九大きに怒り、「原此金は我拾歸りて老母に見せしに、老母我に勸めて原主を尋ねて返さしむ。なんぞ然様の卑き事をなさむ」といふに、彼人猶争ひ罵りてやまず。真九も又屈をいひかけられ、忿に堪ずして互に争募り、竟に彼人真九が髻を取て引倒し、拳を上て打擲しければ、真九も又彼を搔むしり、組つ転びつ揉合ければ、老母も走出て狼狽騒ぎ、衆人も声を上て嘍き立、はなはだ騒動に及ぶ折から、目代職の官人、此処を過て此(3オ)光景を見給ひ、則ち捕卒(とりて)に分付て兩人を拿へ来らしめ、面前に引出して事の始末を尋問ふに一人はいふ、「小人母の言に従ひてに還せしに、他却て小人に屈をいひかけぬ」。官人衆人にむかひて、「誰か此所に在て見証をなす」といふに、衆人皆言を揃へ、「彼旅人、廁の辺にて金子を落し、人を備ひて索れども見えず。真九自ら拾たりといひて、他を引て家に歸り、褻肚を返せしこと我くが見る所なり。但金子の多少は我くども

のしらざる所なり」。官人すなはち捕卒に下知し、兩人と衆人とを齊しく目代所に来らしめ、自ら堂に升りて褻肚と金子とを改め、扨旅人に対して、「汝が金子幾許なりや」と尋給へば、「五拾兩なり」と答ふ。「汝彼が拾取りし金を見よ。是かならず汝が物にあらじ」。旅人いふ、「彼口より自ら拾得(3ウ)たりと告す。是儘なる証拠ならずや」。官人又いふ、「他もし汝が金を負らば、蓋全く取らずして半分を還さむや。又他自ら告ざらば、汝いかにして他が拾ひし事をしるべき。他が自ら告げたるをもつて、彼が負る心なきをしるべし。汝が失ひし金は五拾兩にて、他が拾ひし金は三拾兩なり。しかれば此金は必ず汝が物にあらじ。別に一人の脱せる金なるべし」。旅人いふ、「此金子、寔に小人が物なり。二拾兩の不足はいふとも詮なし。ねがはくば只此三十兩を取て歸るべし」。官人いふ、「員数同じからざれば汝が物とはいはれず。此金子主なき物なれば、真九郎に与て母を養ふ助となさしむべし。汝が五拾兩の金は汝みづから索出すべし」と判断すでに定りければ、真九郎金を得て喜ぶことおほかたならず、恩を謝し、母を扶けて退出す。彼旅人、既に目代所の断を経て、いかなともせんかたなく、羞を(4オ)含み、涙を噙りて退く。衆人皆快しといはざる者なし。原是他人を凶らんと思ひて、翻て自己をうしな。自己は羞慚を稟れど、他人は却て歡喜を得たり。爰に又一箇の奇話あり。妻ある者却て妻を失ひ、妻なき者却て妻を得たるの一條、彼真九郎と旅人と、金ある者は金を失ひ、金なき者却て金を得しが如く、事蹟は異なるれども天理は全く同じ。事長けれど再これを説む。いづれの頃にかありけん、駿河の国府に、清見某といふ者あり。同じ郷士に、高階慶介といふ者と代々の縁者にして、清見氏の一子要人と、高階氏の一女飛鳥と、幼きより婚(えんぐみ)を約せしが、清見氏の父母、数年ならざる内に病死しければ、少年の要人、家事(いへのまかなひ)を収るに堪ず、漸く困窮になりゆき、

此頃は只一軒の破屋をさせるのみにて、殆飢餓(うゑかほく)に及ばんとす。(4ウ)飛鳥が父慶介、此ありさまを見て悔(へんがへ)の意を生じ、夫人畝尾と商議(さうだん)するに、畝尾いふ、「清見氏貧しといへども幼きよりの契(あて)親なれば、何とて離縁(いそ)をなさんや」。慶介いふ、「只人をつかはし、彼を催促(さいそく)して婚礼(こんれい)を急ぎなば、彼其費用を致すに力なく、必ず要人が許より退親(たいしん)を計らん」。畝尾これを聴て、「娘飛鳥は執拗(かたい)なる性質なれば、操を守りておそらくは従(したが)ふまじ」。慶介いふ、「女兒家に在ては父に從ふといへり。いかんぞ吾が言を負かん。汝折を得て、寛に勧め諭すべし」とありければ、畝尾も止むことを得ず、夫の詞にしたがひ、一日娘の房(へや)に入て父が言を伝へ、畝尾さまへ」と語り論(ろん)しければ、飛鳥答ていふやう、「婦の道を守る者は、生涯(しやうがい)只一人に從はんことをねがへり。其一(いち)人の夫を定むるに、財を論じ貧きを嫌ふは人倫(にんりん)の道にあらねば、父上(うへ)かに(5オ)命(いのち)ありとも、此ことには從難(したが)し」。畝尾いふ、「我夫今要人子を促して婚礼(こんれい)を急しむ。彼人もし費用(いりよう)の足ざるを思はば、彼方より離縁(いそ)をいひ来るべし。其時は你(あなた)いかゞすべきや」。飛鳥いふ、「要人主婚礼(こんれい)をなすに力なくして、是非(ぜひ)なく離縁(いそ)し給はば、妾(わらわ)は独(ひとり)寐(ね)の間(ま)を守り、一生(いっしやう)他へは嫁(よめ)らじ。もし父上(うへ)強(つよ)て通(とほ)り給はば、命(いのち)を失ふともいとひ侍(まは)らず」と、赤心(せしん)(まこと)面(おもて)にあらはれ、泪(なみだ)を催(もよほ)して云(い)放(はな)ちければ、畝尾も娘が操正(さくちやう)しきを見て其志(そのこころ)を憐(あは)れ、心にひとつの計(はか)りを生じ、密に要人(いん)を招(まね)きて金子(かね)を与へ、速(すみ)に婚礼(こんれい)をなさしめむと、夫の他行(たぎやう)するを待けるに、幸(さい)なるかな、慶介三河(みかわ)國(くに)に用事(ようじ)ありて出行(いで)しかば、此際(このとき)にこそ事を計(はか)らめと、私(ひそ)かに園公(いんこう)の老人(らうじん)畝平(うへひら)を招(まね)きて、事の次第(しだい)委(まか)しくいひ聞(き)け、「かやうくにして要人(いん)を後門(ごもん)より来(き)らしめよ。(5ウ)決(けつ)して人に語(かた)ることなかれ」と云(い)ければ、畝平(うへひら)直(ただ)に清見家(きよみけ)へ到(いた)り見るに、要人(いん)は家(いへ)に不在(あらず)して、白髪(はくはつ)の嫗(おんな)、竈(かまど)の下(もと)に火(か)を焚(たき)居(ゐ)たり。畝平(うへひら)すなはち嫗(おんな)にむかひて

夫人(ふじん)の言(ことば)を伝(た)へ、嫗(おんな)をして要人(いん)を迎(むか)へりて、吾家(わがや)に來(き)らしめんことを計(はか)り、「是(こゝ)は夫人(ふじん)の内意(ないい)にして、此(こゝ)ほど主君(しゆくん)の他行(たぎやう)ありし間(ま)なれば、速(すみ)に來(き)て時(とき)を誤(あや)るべからず」と頼(たの)置いて歸(かへ)りけり。元來(もとより)此(こゝ)要人(いん)一人(ひとり)の伯母(おば)あり。城外(じやうがい)一里(いちり)余(あ)りある場的(ま)の里(さと)の、八十津(やそつ)氏(うぢ)に嫁(か)しけるが、夫(をと)は已(すで)に死(し)して、一子(いちこ)佳太郎(けいたろう)が為(ため)に媳婦(よめ)を娶(めと)り、家内(かだい)饒(たか)に暮(く)しけり。此(こゝ)日(ひ)要人(いん)は、米(こめ)を借(か)らが為(ため)に伯母(おば)の許(もと)に往(い)て留(とど)守(まも)りしに、彼(かの)嫗(おんな)畝平(うへひら)が言(ことば)を聴(き)て、「此事(このこと)遅(おそ)くならばあしかるべく、又(また)密事(みつじ)なれば人(ひと)を備(そな)へてい(い)ひ遣(や)らんもあしかるべし」と、隣家(となり)の人(ひと)に留(とど)守(まも)るを頼(たの)みて、(6オ)みづからの場(ま)に到(いた)り、伯母(おば)と要人(いん)とに見(み)え、畝平(うへひら)が言(ことば)を仔細(しじゆ)に語(かた)りければ、要人(いん)喜(よろこ)ぶこと大方(おほ)ならず。速(すみ)に往(い)んことを思(おも)へど、此(こゝ)襤褸(つれ)の衣服(いふく)を着(き)て、岳家(たけが)に往(い)んにはあまりに見(み)苦しければ、幸(さい)ひに佳太郎(けいたろう)が衣服(いふく)を借(か)んことを乞(こ)ふ。此(こゝ)佳太郎(けいたろう)素(もと)より心の正(ただ)しからぬ者(もの)なるが、忽(たち)ちひとつの悪(あく)心(しん)を起(おこ)し、答(こた)ていふやう、「衣服(いふく)は容易(いそ)易(やす)きことなるが、今日(けふ)ははや暮(くれ)近(ちか)ければ、高階(たか)氏(うぢ)のごとき豪家(ごうが)は門戸(かど)の出入(でいり)も便(たより)あらず。且(ま)だ、家僕(けやく)等に聞(き)れんもさまあしければ、今夜(こんや)は吾家(わがや)に泊(とど)りて明日(あした)はやく行(ゆ)給(たま)ふべし。吾(われ)は江尻(えじり)の駅(えき)に往(ゆ)べき用事(ようじ)あれば、今夜(こんや)江尻(えじり)にいたり、明朝(あした)はやく歸(かへ)りて、衣服(いふく)を貸(か)し申(まを)すべし」といふに、おのゝ「然(しか)るべし」と同じ(おな)じければ、佳



(6ウ・7オ)

太郎しすましたりと大きに喜び、密に新き衣服に「ウ、あらため、家を出、江戸の方へは往かずして、府中に向ひて急にし走り、高階氏の門に到りて、内の動静を窺ひ居たり。此時高階家には、夫人畝尾、畝平に下知して後門を開きて待しむる所に、夜中一二人の後生、齊整（りつぱ）の衣服を着し、慌はしく走來りけるが、門の傍らに站着敢て進まず。畝平これを見て、「君は清見氏の智君にてはわたらせ給はずや」といふに、佳太郎好凶と嬉しく思ひ、「いかにも小人清見要人なり。夫人の招きによりて爰に来る。此由告て給はらむか」。畝平直に請じて内に入らしめ、夫人に斯と報じければ、畝尾すなはち老女を出して内室に招かしむ。又兩人の了鬢、燈燭を取て前に立ち、彎曲て内室にいたるに、正に是、朱樓（あけのたかどの）画閣（ゑがきいろどりしいへ）ともいふべき居室の結構、目も及ばざることもなり。（8才）佳太郎元來輕き出身の者なれば、か、かの富貴の家にはじめて來り、二ッには村郎にて文筆の事を曉さず、三ッには要人を偽りて來りしゆゑ、危懼（あやふさこはさ）の心を抱き、意氣（こゝろもち）はなほだ舒展ならず。礼貌卑しく、語言汚りて、大家（いへがら）の子弟（こども）のごとくならず。畝尾心の中にいぶかりけるが、又想へば、諺に貧すれば鈍するといふごとく、貧困なるゆゑにおのづから器量も狭りしものならむと、却て憐の心を起し、まづ酒飯を出して管待し、扱飛鳥をも呼出して傍らに居らしむ。佳太郎、小姐を竊眼に見るに、姿色端麗なりければ、密に心を動かせども、飛鳥は深窓に養はれし身の、はじめて丈夫に見るなれば、恥かしさいはんかたなく、只頭を低て言を出さず。畝尾しばらくありて後、飛鳥が（8ウ）操を守ることも具に語り出けるに、佳太郎面を赤らめて一言の答もなく、膝に開きつ塞めつして、扇子に声を出さしむるのみ。畝尾は他が少年にて害羞とのみ思ひて、些のあやしみをなさず。佳太郎此坐在ることは、漆盒の上に蝦蟇（ひ

きがへる）を放ちたるがごとく、はなはだ局促にして只冷なる汗を拭ふのみ。元來酒を好めども、盃をとれば手もと震へ、僅に一掬をくだせば、咽の鳴音に恥らひ、やう／＼些計を飲むに、畝尾強てす、めず、直に酒盃を收拾させ、一室に臥具を設けて佳太郎を宿さしむ。仮公子、仮に帰宅せんことを乞ふに、畝尾敢て從はず、「縁者の家、何の隔意（えんりよ）かあらん。我等又密に語るべき事あり」といふに、仮公子、心中暗（ひそか）に喜び、婢女に誘はれて東廂に安歇ぬ。畝尾、女兒と共に房に入り、（9才）篋の中より私房（ほまち）の銀子（かね）二貫目あまりを取出し、又銀盃（しろがねのさかづき）二対、玳瑁の笄簪など、約三貫目余りに値るべき物を飛鳥に与へて、「你此物を携行て郎君に与へ、婚禮の雜費になさしむべし」といふに、飛鳥害羞て、「妾身いかでかかやうの事を做し得ん」といふに、畝尾又いふ、「你みづから携へ行て、夫婦の情をもつて他人に与へんに、郎君いかでかおほひ給はむ。你もし羞らひて此物を与へずは、婚禮整ふ時なく、其時悔るとも甲斐なからん。此品々、你的袖に隠して携へゆき、必ず人に見すべからず」。飛鳥此道理を聴て、「いかにも命に從ひまゐらせん。されど妾身ひとり、いかでか彼所に到り申すべき」といふに、「然らば乳人を你に添て往しめん」とて、即時に乳人を招き、「汝人静りて後、飛鳥を送りてひそかに東廂に（9ウ）到らしめよ」といひ終り、又口を耳によせて、「汝送り行て内に入らず、只外に在て二人の目にか、らぬやうにすべし」と委しくいひつけければ、乳人其意を會得し、家内の寂靜るを待居たり。斯て仮公子は、ひとり東廂に在て睡らずして待居けるに、夜中にいたりて果して老婆出來り、「小姐みづから爰に來給ふ」といふに、仮公子慌はしく迎入れ、傍に坐して世説をなす。佳太郎、夫人の前にては心臆して一言をも出し得ざりしが、今飛鳥にむかひては、彼が心に協ふべき祭話をなしてさま／＼に

阿るに、飛鳥はじめは恥らひて頭を低れ、声を呑み、とかく退き
 勝なりしが、やう／＼に心定まり、委細の事を語り出し、覚えず泪
 に袖をしぼるに、仮公子も又鼻を噓り、涙を呑て、仮に悲泣(かな
 しみ)の態をなす。飛鳥すなはち袖の中より、白(10才)銀と筭
 簪などを出して手にわたせば、仮公子取て数回おしいたゞき、深く
 夫人の厚情を謝しけるが、誤ちたるふりにて燈を吹消し、やがて飛
 鳥が手とりて欲を求むるに、飛鳥声を立なば婢女等に聞えて、大
 事を壞らん事をおそれ、是非なく袖を顔に当て、他が拳動に従ふ。
 古より、事とまひ思はざれば終に後悔ありといふごとく、畝尾密に
 金をあたへて親事(えんぐみ)を為さしめんとするは、はなはだ善
 計なれども、是ほどの大儀なれば、畠平をして委しく要人が面を見
 せしめ、又他に遇ても、みづから委細を語りて後彼品をあたへ、此
 夜直に帰らしめなば、斯までの大事には及ぶまじきを、女児を東
 廂に遣はして他に贈らせしは、門を開きて盜賊を招くがごとく、な
 んぞ一大事を起さざらん。是女児を愛するよりして、却て(10ウ)
 女児が終身(いつしやう)を誤る。全く畝尾が私計(ないしやう)と
 (の)罪といふべし。天明てより畝尾、仮公子に朝飯を喫しめ、又
 心を添て、「拙夫ひさしからずして家に帰らんま、賢婿はやく
 準備をなして怠ることなかれ」と、丁寧に言を尽して、又後門より
 送出さしむ。佳太郎思ふやう、「我思はざるに大家の閨女を騙し、
 又許多の財を得て、些も馬脚を露さるは万分の僥倖といふべし。
 今日日要人また来らば、十分の美(よきつがふ)といふべからず。
 高階の主人ひさしからずして帰らむと聴けば、我今一日要人を待
 せ置き、明日放ち帰らしめん。其間に慶介もし家に帰りなば、彼ゆ
 くことを得ずして十分よかるべし」と計較(もくろみ)を定め、
 まづ酒塵にいたりて数盃を傾け、やう／＼午後(ひるすぎ)に及びて家に帰りけ
 るに、要人は佳太郎が帰り来るを、今朝より待居れども帰り来らず、

衣(11才)服を借得ざれば帰るべきにもあらず。伯母も心を燥ち、
 家頼を遣はして江尻の駅を尋さするに、其行方をしらざれば、媳婦
 の小鷹が房に入りて、「児子が衣服ありや」と問ふに、小鷹答て、
 「丈夫みづから箱の中に納めて、鑰を留す」といふ。元来小鷹は、
 平群左右馬が女児にして顔色艶麗(かほかたちうるはしく)、しか
 のみならず好て書を読み、略道理に通ず。左右馬は近辺に名高き豪
 傑にして、弱きを救ひ、強きを折くの俠士(をとこぎの人)なるが、
 或人他を憎みて罪に陥れんとせしを、佳太郎が父、要人が父と心を
 合せ、其冤を救ひしかば、左右馬深く其恩を感じ、女児小鷹をもつ
 媳とはしけるなり。此小鷹、父に似て些の俠氣(たてひき)ありし
 が、丈夫の愚にして、且不良心あるを見て、平常睦しからず。衣服
 の類も佳太郎みづから收拾て、小鷹には管(11ウ)はせざるゆゑ、
 自ら鑰を携へて出ゆきしなり。斯て伯母甥兩人こゝろ焦である所に、
 佳太郎満面(まつかに)酒氣(多ひ)を帯て浮浪(うら)として帰り来
 るに、老娘罵りていふ、「要人此所(ここ)に在りて汝が衣服を待つに、汝
 何方(どこ)に行てか日を費し、家には帰り来らざるや」。佳太郎一言の
 応答もなく、直に自己が房(へや)に入て袖裏(そでのうち)の物取出し、
 密に蔵し置て後、やう／＼出来り要人(よめ)に對ひていふ、「適聊(たしか)の用事
 に際どりて你的(おの)用を欠たり。ねがはくは怪まる、ことなかれ。今日
 も早暮(はやくれ)に逼りたれば、明日家に帰り給はんや」。老娘又罵りて云、
 「汝(なんぢ)只衣服を出して貸与へよ。他が用事は他が心に任す。今日明日
 に管ふことなかれ」。要人いふ、「只衣服のみならず、佩刀のたぐひ
 も亦恩借を乞ふ」。佳太郎いふ、「吾佩刀、柄糸損しゆゑ工人の許に
 遣し置しが、今夜取来りて(12才)明朝早く貸まらせん」。要人
 せんかたなく又一夜を過し、明朝に至るに、佳太郎宿醉(よめ)に悩み、
 頭疼きとして起上らず。漸く巳時(よつどき)に至りて起出、早飯を喫ひ、慢々
 として衣服佩刀を貸与へければ、姑娘これを包袱に包み、又数升の

白米、些の野菜等、一人の家僕に担はせて要人を送り出し、又告ていふ、「あなたの婚礼成就しなば、はやく吾に告て我牽掛を停しめよ」。要人礼をなして立出るに、佳太郎門外に送り出、示していふ、「足下今より高階家に往給は、よく心を用ひよ。他が心の中、真か仮かまだしるべからず。我思ふに、表門より明かに進むべし。若後門の花園曠野（のひろき）の地に入りて、他が真情ならざるときは、歩（あゆみ）を退るに所なからむ。只こゝろをつけて、仔細に想ふべし」といふに、要人その用意を謝し、急ぎ家に（13ウ）帰りて衣服を整へけるが、便袋はなはだ損じて見苦しければ、隣家より火熨斗を借りて皺を熨し、又飯顆を取て破れを補ひ、又は墨にて塗かくし等、かれこれ時を移し、漸く扱ち得て斉整（りつぱ）になりければ、纔に進みて高階家に到るに、門公これを見て生客なりと思ひ、「主君此節他国に行て留守なれば、帰国の後再び来り給へ」といふに、要人舒に答ていふ、「汝夫人に告て、要人が来れる由をいふべし」とあるに、門公はじめて清見氏なることをしれども、何ゆゑに来れる事をしらざれば、又答て、「主人家に在ざれば、猥りに報じがたし」といふ。要人これを聴て、夫人の招きによりて来れる由を演げれば、門公内に入て此旨を告す。畝尾これを聴ては



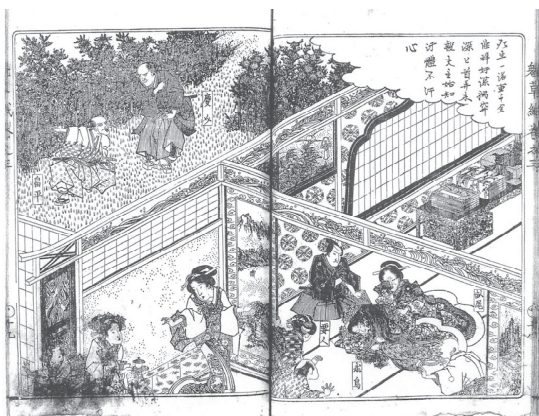
(12ウ・13オ)

なはだ怪しみ、「他何事ありてか再び又来れる」と、正庁に迎へ入らしめ、乳人を出して（14オ）縁故を尋ねしむるに、乳人出来りて一目見るより、忽ち駭きて走入り、夫人にむかひていふやう、「今日の婿公は仮公子にて、前夜の人にあらず。前夜の人は色黒く麻臉（みつちやつら）なりしが、今日の人はいろく形肥ず、十分（あつぱれ）の好男子（いろをとこ）なり」。畝尾誠とせず、自ら庁にいたり、障子の陰より伺見るに、果して前夜の人にあらず。心中はなはだ疑ひ、乳人を出して尋ねしむるに、言語清爽にして少しも滯らず。畝尾はじめに仮公子を見し時、心中少しく疑惑ありしが、今日の婿は容貌端麗に、語言文雅ありて、真に清見氏の嫡子といふべき人物なれば、又乳人を出して、今日何の故に来れるぞと問しむるに、要人答ていふ、「前日老園公をして小人を招き給ふ所、をりふし他所に滞留し、漸く今日家に帰り、特来りて謁奉る。望むらくは遅緩し罪を恕し（14ウ）給へ」。畝尾これを聞て、真の婿なることを曉りけるが、只前夜来りし者は何奴ならんと慌忙しく房に入り、飛鳥に此由を語りて、「都て是、夫が天理を思はざるより起りて、あなたの身を傷りしこと、後悔すれども及はず。幸に他人のしることなけれど、今女婿に、在て、贈るべき一物なきをいかにせん」といふに、飛鳥大きに呆れおどろき、千の針にて吾身を刺がごとく、愁へ悶えてしばらく物をもいはざりしが、漸く心に心をさだめ、「母上まづ智君に謁え給へ。妾少しく計らふ旨あり」といひければ、畝尾飛鳥が詞にしたがひ、出て要人に対面するに、要人岳母を見て懇慫に礼を謝し、「在下家貧くして多く礼を失ふことあり。幸に岳母公の不棄に逢ふ。此恩死すとも敢て忘れじ」。畝尾心に恥入りて答ふべき詞なく、乳人を（15オ）して飛鳥を呼来てまみえしめむとす。飛鳥は簾の中に在て窺ひ見れども、いかでか此処に来てまみゆべき。只乳人をして言を伝へていふ、「君いかなれば他所にありて、

妾が母上の深切にそむき給ふや」。要人いふ、「小人病を患ふるゆゑに是非なく他所に滞り、今日爰に来て約束に応ず。なんぞ負といはん」。飛鳥、簾の中より答ていふ、「三日以前に來給はゞ、妾君にしたがふべけれど、今三日遅かりしゆゑ、君にしたがひまゐらすことを得ず。金帛のたぐひも又贈ることかなはねば、此二股の釵をおくりて、妾の微志をあらはすのみ。君此後は、更に嫁君を振り給ひて、妾に心を遣し給ふな」と、乳人をして釵を与しめ、又いふ、「君しばらくしておのづから縁故をしり給ふべし。速に帰り給へ。こゝに在て益なからむ」といひ終り、涙にむせびて（15ウ）内に入りぬ。要人心中大きに疑ひ、夫人にむかひて色を起していふ、「小人貧しけれども、釵を求めんとて爰に來るにあらず。今日小姐離縁の意あるに似たり。夫人なんぞ一言を出さざるや」。畝尾いふ、「妾母子並に異心（かはるこゝろ）なし。但君が來給ふこと遅きゆゑ、女兒が心には姻事（えんぐみのこと）を重しと思さることを察し、恨み憤る所なり。君疑ふことをやめ給へ」。要人敢て信とせず、「吾父存生の日は、さばかり懇意の交りなりしものを、今岳父は富栄え、吾家は貧しく衰ふといへども、なんぞ改め變ずるに忍びんや。小人たゞ岳母一人を倚頼とせしに、三日おくれたればとて離縁のことを計り給ふは、理のある所にあらず」とさまゞくに恨歎きければ、畝尾答ふべき詞なく、黙然として在けるに、忽ち裡面騒がしく、「夫人はやく來りて小姐を救ひ（16オ）給へ」と泣叫ぶ声におどろき、畝尾何事やらんと慌騒ぎ、一室の裡に入りて見るに、哀むべし女兒飛鳥、短刀をもつて咽をつらぬき、俯伏になりて死居たり。こはいかにと搔掻き、さまゞくに介抱すれども、息すずに絶え、呼醒せどもしるしなし。衆人せんかたなく、声を放ちて悲み歎きけるが、畝尾やう／＼涙をおさへ、要人を呼びて此体を見せしむ。要人此形勢を見て、何の縁故あることをしらねど、乱箭の胸を突くがごとく声

を上げて泣けるに、畝尾いふやう、「賢婿ひさしく此処に停らば、恐らくは事を引出さん。はやく家に帰らたまへ」と、乳人をして要人が袖裏へ両股の簪をおし入れしめ、速に送りて門を出す。要人はいかにともせんかたなく、涙をおさへて家に帰る。斯て畝尾、人を三河に馳て慶介を呼帰らしめ、委しきことは語らずして、（16ウ）只「女兒婚禮を止ることをねがはず、自害して果たり」といひければ、慶介後悔すれども及ばず、やう／＼に葬り終ぬ。かくて要人は家に還り、釵児を見て一度は疑ひ、いかなるわけかはしらねども、自家の薄命（うすめい）（ふしあはせ）をあきらめて一夜を過し、次日にいたりて、借たる所の衣服佩刀等もとのごとく包み、みづからの場に行て送り帰し、伯母に謁えて飛鳥が自害せしことを語り、互に憐み哭きて別れ帰りぬ。佳太郎は要人が別れ去りし跡へ、他所より歸來りけるが、要人が來りし事を聞て老母にむかひ、「高階氏の事はいかゞなりし。聞給ひつるか」と問ふに、老母答へて、「要人昨日高階家に往しに、何のわけなるかはしらねど、彼小姐、要人が三日遅かりしを恨みて、自害したる由語りし」といふに、佳太郎大きに駭き、おぼえず失口で、「噫、世にすぐれたる美人（17オ）なりしに、惜むべし。斯としらばいかにして今一度逢ふべき物を」といふに、老母怪しみて、「汝いかにして彼小姐に遇し」と問ふに、佳太郎只今の失言（しつげん）（くちすべる）につゝ、むべきやうなく、やむことを得ずして委細を語れば、母大きに駭駭りていふ、「天理をしらぬ畜生。かやうの悪事を巧み出していかにとかする。要人が親は汝が婚（えんぐみ）を媒せしに、汝却て恩を仇にて報じ、兄弟の姻縁（いんえん）（とつぐこと）を壊り、又人の命を損ず。世に類なき畜生。何の顔ありてか天地の間に立ん」。佳太郎母に罵られ答ふべき詞なく、房の中に入らんとするに、妻の小鷹戸を閉て開かず、内より罵りていふ、「你かやうの不義の人、ひさしからずして天の報あらん。決して終を善す

べからず。以来は你是は你よ、
 妻は妾なり。人を連累にし
 給ふな」。佳太郎、生平夫
 婦和睦しからねば、此言を
 聴てますく怒り、戸を踢
 放て(17ウ)内に入り、小
 鷹が髪を揪で引倒し、力に
 まかせて打擲す。老母慌
 忙て走り来り、佳太郎を喝
 て早くに出行しめ、扱小
 鷹をさまぐに騙し宥め
 て、漸に轡に乘らしめ、ま
 づ暫く娘家に居らしめし
 が、此老婆驚苦を得し上
 に、事の露はれんことを恐
 れ、一夜睡らずして寒熱甚しく、病む事七日、終に死し去りぬ。小
 鷹岳母の死せし由を聞いて速に帰り来るに、佳太郎前日の憤りいまだ
 やまず、罵ていふ、「薄情婦、一生娘家に在るべきを、なんぞ又
 帰り来れる」。小鷹いふ、「你悪事を醸し出し、又老母を氣死(お
 もひじに)さしめ、妾を罵るは何の道理ぞや。今日老母の亡給ふこ
 となくは、あなたが面を見ざらんものを」。佳太郎これを聴て大きに怒り、
 「我今日休書を与ん。汝去て再び来ることなかれ」。小鷹いふ、「妾
 一生寡を守るとも、あなたがことなき不義の徒に(18オ)従ふことをねが
 はず」。佳太郎すなはち休書を書きてあたへければ、小鷹岳母の霊
 位に對し声を上げて哭き、やうく門を出て去る。扱又畝尾は、娘
 飛鳥が事をおもひて、泪の乾く間もなかりしが、暗に思ふやう、
 「前日来りし黒漢は、畠平が連れ来りしなれば、彼も共に巧みて此事



(18ウ・19オ)

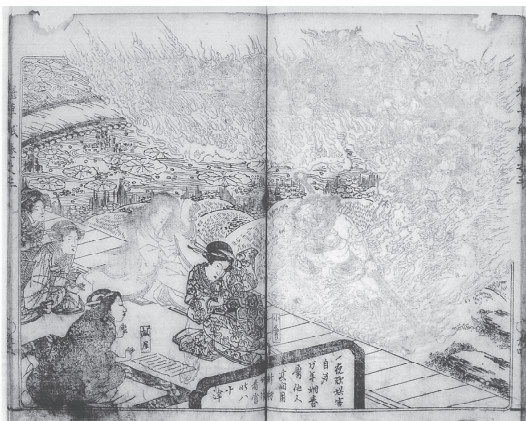
をなせしか。然らずば他人に洩し聞せしものならん。何にもせよ、
 畠平を点視(ぎんみ)せば明白なるべし」と、良人の留守を伺ひ、
 園公を呼びて訊問ふ。元来園公畠平は、清見家へ使に行きし後も、
 敢て他に洩せし事なし。只要人が衣服を借らんとせしゆゑに惹出せ
 し奸計(わるだくみ)なれば、当夜来れるは仮公子にて、三日の後
 来れるは真の女婿なり。真仮(まこと、にせと)兩人ある事、畝尾
 は明かに曉りたれども、此畠平は、只前後来れるともに一人なりと
 のみ思ひ居しかば、分弁(ぶんべん)分明ならず。素より畝尾は、此畠
 平も奸計(わるだくみ)の夥ならんと疑ひ居し所なれば、他が詞の
 分明ならざるを見て、いよく怒に堪かね、傍なる扇を取て、他が
 額をつげざまに四ツ五ツ打しに、老人の皮薄ければ、忽ち皮開け
 血流れて淋漓(ぼたく)せしを、婢女等漸に助けて房に帰らしむ。
 一日慶介園中(には)に到り、畠平を呼て地を掃せけるが、他が額
 に疵あるを見て、其縁故を問ふに、「是はすなはち夫人に打れし疵
 なり」といひければ、いよく怪みて深く訊問ふに、畠平すなはち
 清見家へ使に行しよりはじめて、要人來りて房中(へやのうち)に
 て飛鳥に遇ひし事に至るまで一くに告げれば、慶介はじめて此
 縁故を聴、大きに怒り、即時みづから目代所に到りて、官人に此事
 を訴へ、要人を拿へて飛鳥が命を償はんことを求む。官人すなはち
 (20オ)捕卒(とりて)を馳て、要人を拿へ来らしめ、審かに訊問(たゞ
 しとふ)するに、要人素より老実(りちぎ)の者なれば、実情(ま
 こと)を細に告訴へ、「釵二股は他が贈る所なれども、房中(へや)
 において私に會しことは實におぼえなし」といふに、官人まづ畠平
 を呼出して要人を見せしむ。此老人、両眼明かならざる上、暗夜な
 れば仮公子の面を覚えす。且今日主人の分付もあれば、只一人こ
 そ前夜來りし人なれ」といひければ、官人下司に命じて、呵嘖(せ
 めさいなみ)する事厳なり。要人は元来温良(やはらか)なる性

なれば、拷問の苦みに堪ず、仮(わざと)に告ていふ、「高階氏の夫人、懇切に小人を招き、釵を贈りて婚禮の資とす。在下偶女兒の美貌を見て、強て逼りて奸を行ひ、三日の後再び往くに、女兒羞憤りて自害したり」と告ければ、官人口詞を録し、「要人飛鳥と契親せしのみ(20ウ)にて、いまだ聘を納ざれば、夫妻をもつて論じがたし。既に奸によりて死を致す上は、要人が解死人遁る、所なし」と、直に擲めて獄に下し、文書を備へて問注所に言上す。畝尾此由を聞いて大きに驚き、「此一件、全く要人がしるることならず。我私計(わたくしごと)より事起りて、罪なき要人を害するに至る」と、心中はなはだ悶え苦み、屢良人をすゝめて要人が命を全うせんことを謀る。慶介いよ／＼怒を加へ、はやく要人を害して、娘が仇を報はんとのみ思ひ居けり。爰に津守正司といふ者あり。此人の父は前年慶介と同学(おなじまなび)の友なり。此人年壮けれども聡明(かしこき人)にして、専ら冤を弁へ、枉れるを拆く事を好み、官家(おほやけ)に仕へて登庸(とりたて)の時に遇しが、此時巡按司となりて此国に來り、いまだ境に入らざる時、慶介旅宿に行て此事を托(たく)けるに、正司口には諾といへども、心には然りとせず。府中に留ること数日、牌を出して獄訟(ひとやにあるうつたへ)を聴く。是則ち巡按司の司る所なり。これに仍て衆官人、皆犯人を引出すに、正司一／＼明白に裁断し、要人が事に到りて、招詞を讀み、釵を見終り、すなはち要人を呼出し、問ていふ、「此釵はじめて遇ひし時、汝に与へし物か」。要人いふ、「小人只一度行しのみにて、再び行しことなし」。正司いふ、「口調に三日の後又行きしとあるは何ぞや」。要人いふ、「小人拷問の苦痛に堪ず、是非なく冤に陥りて、告す所実情にあらず。小人が父親存生の日、高階氏と婚姻を約せしが、父亡て後、家道(しんだい)貧しく、聘(ゆひのう)を行ふに力なし。岳父慶介離縁の心あれども、岳母畝尾といふ者、園

公畠平をして小人を招き、金帛(こがねまきぎぬ)を贈りて聘信(こゝろいりりよう)の資とせんとす。在下(21ウ)他所に在しゆゑ、三日の後はじめて行きしに、只岳母を見て、曾て小姐の面を見ず。奸情ありと告せしは悉く虚誕なり」。正司いふ、「既に小姐を見ずば、此釵何人か汝に贈れる」。要人いふ、「小姐簾の中にありて、小人が到る事の遅くして事を誤るを責め、『婚姻の事をいふことなかれ。金帛も又贈ること能はず。此釵聊留めて記念となす』といへり。小人只離縁の語なりとのみ思ひて、岳母と争ひ論ずる所に、はからざりき、房中(ひとま)にて自害して果ぬ。小人今にいたるまで其ゆゑをしらず」。正司いふ、「しからは其夜、汝後園に到らざるや」。要人いふ、「小人表門より入て正庁に在しのみ。曾て後園をしらず」。正司心に想ふやう、「もし特地招きたらば、なんぞ釵のごとき微物をあたへんや。女兒が怨み憤りし口氣を察するに、かならず人有て金帛を貪り、奸情を(22ウ)通ぜしゆゑに、女兒羞憤りてみづから死せしものならん」と思ひければ、畠平を呼て問ていふ、「汝清見家に到りし時、要人を見しや否」。畠平いふ、「曾て見ず」。正司いふ、「既に面を見たる事なくは、夜中來りし時、いかにして要人なることをしりしや」。畠平いふ、「他みづから要人と稱し、特來りて約に赴くと告せり。小人主母の命によりて他を裡に入たり」。正司いふ、「彼何時にか歸り去りし」。畠平いふ、「天明てより歸れり」。正司いふ、「再び來りし時も汝が案内にて通せしか」。畠平いふ、「再度は前門より來りしゆゑに、小人預りしらず」。正司いふ、「他はじめはなんぞ前門より入らずして、後園に來て汝を尋ねしや」。畠平いふ、「我家の主母、小人を遣はして言を伝へ、他をして後園に來らしむ」。正司其時要人にむかひ、「岳母、汝をして後園に來れといへるを、(22ウ)汝なんぞ前門に行きしや。要人いふ、「小生他が心の真仮(まことうそ)をしらず。只園中(にはのうち)曠野(のひろき)の地

なれば、他が暗算を恐れ、後園に行ずして前門より入りしなり。正司思ふに、「要人が語と畠平が詞とおのづから両様なり。其中かならず情弊あらん」と、又要人を指さして畠平に問ていふ、「彼後園より来りし者、此男なりや否」。畠平いふ、「夜中老眼にてしかとは覚えねども、此人なるべし」。正司いふ、「要人家に不在して、何人にか言を伝へたる」。畠平いふ、「他家には白髪の嫗一人あり。此嫗にいひおきぬ。別に一人も聞たる者なし」。正司沈吟（しあん）する事しばらくして、又要人にむかひ、「汝其時何処に行、又いつれの時か此信を聞たる」。要人いふ、「此処を離る、事一里余り、的場の里に行しが、其日信を聞たり」。正司案を拍て呼はつていはく、「汝要人、三日の後はじめて高階家に（23オ）到るといひしは、虚妄なること明白なり。本日此信を聞て速に到りしならん。なんぞ三日を過さんや」。要人いふ、「相公怒を息給へ。小生委しく告奉るべし。小生困窮に逼り、此の米を借んがため、的場なる伯母の家に行きしが、此信を聞て速に行んと思へど、衣服あまりに見苦きゆゑ、表兄に衣服を借んとせしに、表兄、当日用事ありとて家を出、やうく次日の夕歸り来りしかども、いまだ衣服を借さず。第三日にいたりて漸に借得て歸りぬ」。正司いふ、「汝が表兄、名を何と呼びて何をか業とするや」。要人いふ、「名を佳太郎と呼びて、的場村の豪農（おほびやくせう）なり」。正司聴終りて、「明日再び審問（きんみ）んみ）すべし」と衆人を退かしめしが、次日は病ありとて公事（こうじ）つたへごと）を収（きかず）めず。爰に彼佳太郎は、要人が死刑に究りし由を聴て、暗に喜び、心を安うして居けるが、一日（23ウ）門前騒（もんぜんさわ）がしかりければ、何事ぞと立出見るに、一人の絹を売る旅人、東国の声音にて高らかにいふを聴けば、「吾は上毛の者なるが、はじめて此国に来て絹を売んとせしに、古郷の父が亡しゆゑ急に帰らんと思へども、猶許多の絹あり。今急に売らん事を計るゆゑ、大

きに価を減ずべし。願はくは求め給へ」といふ。衆人の中、一疋を買はんといふ者あり。二疋三疋を買はんといふものあり。旅人すべて首を揺ていふ、「さやうに些ばかりを売ては、数日を経るとも便じがたし。只財主ありて一総買給はんことをねがふ」といひければ、佳太郎これを聴て、「汝いかほどの絹ありて、いかほどの価に売らんといふや」。旅人いふ、「猶八十疋を余せり。此本価四貫目余なり。吾今三貫五百目を得ば速に売終り、身を軽うして帰国せんことを思ふ」。佳太郎布を（24オ）取て仔細に見終り、「吾一貫五百目を出さんに、汝半を分て我に売れ」といへば、絹買人首を揺り、「いかんぞさやうの価あらん。且半を売て、半をば誰にか売るべき。汝は買はんと思ふ人にあらず。是より府中に至らば、彼所は財主多き所なれば、速に買人多かるべし」といふに、佳太郎心に憤を含み、又価の高からぬを見て、敢て他を放さずしていふ、「然らば我のこらず求むべきが、汝又いかほどをか減ずる」。旅人いふ、「你もし実に買はんとならば、我又百目を減ずべし」。佳太郎いふ、「吾三貫二百目を出さん」。旅人きかず。傍の人言を發していふ、「我々は事に預らずといへども、今媒をなすべし。まづ左右をいはず、兩人いはる、所の中を取りて、三貫三百目にて交易し給ふべし」。旅人は



(24ウ・25オ)

じめは伏せざりしが、衆人に勧められ、やう／＼にいふ、「然らば此百目の銀子は、(25ウ) 各の面上(おかほ) に対して減ずべし。おはやく儲銀(だいいもつ) を出し給へ。吾連夜にいそぎ帰らん」。佳太郎いふ、「銀子少し不足なれば、玳瑁の笄等(はな) を贈らんに、汝取らんや否」。旅人はじめは領ざりしが、やう／＼に承伏し、「いかにもせんかたなし。只公道(通り相場) に価を定むべし」といふに、佳太郎すなはち銀子と笄の類(たぐひ) を取出し、衆人に見せて公道に価をさだめ、都て三貫三百目の数に満しめければ、客人是を領り、絹を与て別去りぬ。佳太郎今日の交易、幾許の利あれば、心中喜ぶ事限りなし。誰かしらん、此絹を販ぐ者は正に是、津守正司なることを。此人病に托して門を閉、ひそかに爰に来て消息を伺ひしなり。此時又捕卒(とりて) に命じて、佳太郎を拿へ来らしめ、又書を投して慶介を招き、みづから病愈たりと称して(26才) 門をひらくに、慶介出来りければ、後堂に招き酒を勧むるに、慶介又要人が事に及ぶ。津守笑ていふ、「今日君を此所に招くは、専ら此事の爲なり」と。すはなち篋をひらきて、銀盃(しろがねのさかづき) 二対と許多の首飾(あまたのかんざくひ) を取出して見せければ、慶介、是我が家の物なるを見て、大きに駭き問ていふ、「此物何所より得給ひしや」。正司いふ、「令愛の死亡、たゞ此物の故により。君寛と坐し給へ。吾今眼前に君の疑を晴し申さん」と。則ち要人が一起を呼出して傍に在しめ、又佳太郎を呼出し、みづから喝ていはく、「汝なんぞ高階家に行て賊(ぬすみ) をなせしや」。佳太郎此一句を聴て、青天に雷の落たるごとく駭き慌て口を開得ず。正司すなはち銀盃と首飾とを取出していふ、「此物は何処より来れるぞ」。佳太郎頭を拍げて見るに、此相公は(26ウ) 正に是、絹売の旅人なり。再び驚き恐れて、顔色土のごとく、只「小人罪あり。ゆるし給へ」と叫ぶ。正司いふ、「吾拷問を用ひず。汝白地に白状すべし」。佳太郎つ、むことを得ず、

仔細審かに白状しければ、正司招詞を取り、又畠平を呼て、「前日夜中後門より入りしは此者にあらずや」と問ふに、畠平瞬もせず見居たりしが、すなはちいふ、「正に此人なり、此のひと」。正司すなはち佳太郎を死刑に決し、要人を釈して家に帰らしむ。斯て慶介は後堂に在て、此由をき、大きに駭き、正司が内に入るを待て、再三謝していふ、「君の裁断にあらずは、女兒が恨情の所なからん。但銀両首飾(しろがねあるひはかんざしるい) いかゞして得給ひしや」。正司声を低うしてかやう／＼と語るに、慶介ふかく嘆伏し、「但此一件、佳太郎が妻しかならず此情を(27才) しらん。吾家の首飾、いまだ彼所に残りあらんもしらず。君ねがはくは是をも尋ねて給はるべし」。正司「容易き事なり」とて、又佳太郎を呼出し問ていふ、「汝が妻しも又此事をしれりや」。佳太郎心中妻を恨み居ければ、答て云、「妻小鷹、財物を負るゆゑに、其実は同じく謀を合せたり」。正司速に人を馳て、小鷹を呼出さしむ。扱又小鷹は八津氏を離縁して後、父母ともに亡ければ、兄静介が許に養はれ、針線に日を送りけるが、此日静介、奥前にて此信をき、いそぎ帰りて告しらせけるに、小鷹すこしも驚かず、「大哥騒ぎ給ふな。妾みづから道理あり」と、彼休書を懐に入れ、直に高階家にいたり、夫人にまみえんとす。畝尾はるかに小鷹が入来るを見るに、正しく娘の飛鳥なりければ、驚きて問はんとしける内、(27ウ) 前にちかづきてよく見れば、いまだ見しらぬ麗しき婦人なり。いよく怪みて「誰ぞ」と問ふに、小鷹拝伏していふ、「妾は是、八十津佳太郎が妻小鷹といふ者なるが、夫の所行よからざるを見限り、疾より離縁して今は兄の許にあり」と、「一張の休書を取り出し、夫人これを見給ひて、妾が夫に与せざることを察め給へ」とありければ、夫人取て開見る所に、小鷹忽然として音声かまり、夫人に取つて声を放て泣叫び、「母上憐み給へ。婚姻を更改せんとし給ひて、父上妾

を害し給へり」。畝尾正しく飛鳥が声なるを聴て大きに哭き、やうくにしていふ、「扱又飛鳥が幽魂なるか。非業に死せし你的魂魄、宙宇に迷ひ在けるか。斯く形容を現はして、妾に何の願かある」。小鷹此時眼を閉ち、悲歎に逼りて見えけるが、泪をとめていふ、(28才)「妾はからずも姦人に身を汚せしゆゑ、清見氏に謁んことを羞らひ、みづから死して貞節を尽せり。しかるを父上、委しく事を正さずして、殆賢婚の命を失はんとし給へり。是母上と妾として、彼を誤るといふものなり。要人主、幸ひに縲繩を免れ給へども、いまだ妻の娶るべきなし。母上もし妾を憐み給はらば、父上にとりなして、他に一人の媳婦を与へ、親家(しんるい)の縁を絶つ事なくは、妾九泉(くさば)の下(かけ)に在て、恨む事なかるべし。此一事をねがはん為、遙く現はれ出たるなり。冥途と娑婆との境界は、十万里を隔つといへども、契親せし賢婚の冤を救ひまゐらせんと、貞操の一念たゆまず、人頭幢の視眼を忍び、又嗅鼻の鼻を覆ひて、刀山劍樹(つるぎのやま)に身を貫かれ、三途八難の業苦をも厭はずして、やうく此土に来るといへども、一世に限れる親子の縁は是非もなし。身は(28ウ)傍に在ながら一言をも交がたく、仮に小鷹の身を借て母上に告まゐらす。斯いふ中にも時こそ移れ。焰王殿には閻羅天子、幽冥閣には幽冥王、其數十王五道の冥官、おのく鉄簿の数を量りて罪人の出没を正し、等活・紅蓮・阿鼻・焦熱、一百三十六地獄の獄卒に命を下せば、牛頭馬頭・悪鬼羅刹の輩、呵噴の火車(ひのくるま)を轟かして、鉄の棒を打振り、『はや来れ、疾乗れ』と促す事類なれば、妾は冥府(むく)に還るなり」と、身を起すよと見えけるが、其俣倒れて悶絶す。了鬢等走り、水を吹かけ名を呼て、さまく介抱しければ、小鷹やうく心づき、其身は直に起上るといへども、忙然として事を弁へず。畝尾ひたすら啼泣(なきさけび)して止ざりしが、涙ながらに小鷹

に對ひ、「你に父母ありや」と問へば、父母亡なりし由を答ふるにぞ、(29才)畝尾聴て大きに喜び、「妾你的形容を見るに、正しく娘飛鳥に似たり。你我が義女とならんや否」。小鷹いふ、「もし夫人に仕へ奉らば、妾が身の幸ひなり」。畝尾かぎりなく喜びて、小鷹を傍に留置けり。扱慶介家に歸りて後、小鷹は佳太郎と離縁して、他に預ることなき由をき、彼休書を正司に見せて、小鷹が罪なきよしを明らめ、又小鷹が賢にして智あるを見て、畝尾が勧めに従ひ、養ひて義女(やしなひむすめ)となしぬ。畝尾又丈夫にむかひて、娘飛鳥が小鷹の骸を借て魂を現はし、清見氏と姻縁を絶つことなかれと再三たのみ置し事を語り、「今小鷹が為に要人を女婿となして、前姻(まへのえんぐみ)を続なばいかあらん」といふに、慶介罪なき要人に苦を請させし事、我誤りなりと常に悔み居ければ、妻の詞の理あるを見て、其勸に従はんと(29ウ)思へども、要人が疑あらんことを恐れ、みづから清見が家に行て罪を謝し、又統親(えんをつぐ)の事を計るに、要人再三辞退しけるが、竟に其意にしたがひ、彼釵を聘信(たのみ)となし、日を拵みて婚禮を整ふ。元來慶介、要人にむかひて姪なりとのみいひ、畝尾も小鷹には要人なりといはず、婚姻の夜に至りて、小鷹は婿を要人なりと知り、要人も佳太郎が先妻小鷹なることをしりぬ。扱彼目代某は、要人を冤の罪に墜し、死刑に定めし不穿鑿、はなはだ越度なりとありて、官をも罷らるべかりしを、巡按司津守正司が仁心によりて、しばらく閉門の身となりしが、正司再び問注所に告訴へて、彼が罪を宥しかば、原のごとく目代の官に居れり。かくて要人小鷹は、夫婦はなはだ睦ましく、養父母(やしなひおや)に孝順(30才)なりけるが、慶介子なく、要人遂に高階氏の統を継ぎ、後來国司に仕へて高官(たかきくらゐ)に陞り、男子二人を生じ、一人は清見氏、一人は高階氏を統しめ、子孫連綿として栄えけり。原此一回の始末、要人が

約親の妻は、図らずも佳太郎に犯されて共に終身（いつしやう）を誤り、佳太郎が妻は、想はずも要人に姻て夫婦安佚（やすらか）に栄ゆ。善縁（よきえに）の人悪縁（あくえん）に変わり、悪縁の人善縁となる。禍福凶吉常ならざるかな、吁。

梅精奇談魁草紙卷之三畢（30ウ）

【注】

- (1) 本田康雄「式亭三馬の世界」（『式亭三馬の文芸』、笠間書院、昭和四十八年）。
- (2) 引用は『燕石十種』第二卷（中央公論社）により、句読点を一部改めた。
- (3) 巻首の標題は「羽束身を汚して却て身を清く話の上」となっているが、「下」はなく、この一卷に作品の全体が収められている。
- (4) 後藤丹治「読本三種考証―桜姫全伝・月氷奇縁・阿古義物語―」（『国語国文』第八卷第四号、昭和十三年四月）、本田康雄「式亭三馬の世界」（『前掲』。卷一・二・五の原話は後藤氏、卷三・四の原話は本田氏によって指摘された）。
- (5) 注1本田論文、注4後藤論文。
- (6) ちなみに白話小説を利用したその他の三馬作品については、井上啓治「式亭三馬と白話小説―『阿古義物語』をめぐって―」（『近世文藝』第四十一号、昭和五十九年十一月）、「続・式亭三馬と白話小説―『大尺舞花街始』と『五鳳吟』―」（『国文学研究』第九十一号、昭和六十二年三月）、「馬琴への対抗と黙阿弥への影響―続々式亭三馬と白話小説・『坂東太郎』『杜騙新書』と『弁天小僧』―」（『近世文藝』第四十六号、昭和六十二年六月）に言及がある。
- (7) ただし巻之二は「魁草紙」の読み仮名が「さきがけざうし」。

(8) ただし巻之二・三は「魁草紙」の読み仮名が「さきがけざうし」。また、巻之四の尾題には読み仮名がない。

- (9) 甲乙点は上下点の誤り。
- (10) 底本「畜」。以下同様。
- (11) 底本「見試」。
- (12) 底本「悞」。以下同様。
- (13) 底本「管侍」。以下同様の例があるが、いちいち注しない。
- (14) 底本「候」。
- (15) 底本「賤別」。
- (16) 底本「千刃」。
- (17) 「従ひて」の誤りか。
- (18) これまで「央助」であったものが、以後「央介」の表記も見られるようになる。
- (19) 「東吾」とあるのは原文ママ。
- (20) 底本「週遊」。
- (21) 「おぼえ」の誤りか。
- (22) 底本「隠徳」。
- (23) この文字の後に二字分の空格あり。
- (24) 底本「巖」。
- (25) 底本「二チ人」。
- (26) 底本「晴」。

【附記】

翻刻ならびに図版の掲載を御許可くださった国立国会図書館に深謝申し上げます。